

障害者スポーツにおける相互行為分析

—平成12年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版)—

目次

まえがき	樫田美雄	-----	1
第Ⅰ部 本文を読む前に			
トランスクリプト記号一覧	車椅子バスケットボール班	-----	3
日程表	各班	-----	4
調査依頼文例	盲人卓球班	-----	5
第Ⅱ部 本文			
第1章 ルールの運用からみる盲人卓球	盲人卓球班	-----	7
第2章 車椅子バスケットボールとはどのようなスポーツか？	車椅子バスケットボール班	-----	25
第3章 ろう者バレーボールにおける カスケーディングとソーシャル・リフレクション — 「相互反映性」と「文脈依存性」 — ろう者バレーボール班		-----	35
第Ⅲ部 付録			
第1章 トランスクリプト例	ろう者バレーボール班	-----	45
第2章 障害者スポーツと人生 — 障害者水泳選手へのインタビューの記録 — 阿部智恵子		-----	53
執筆者一覧		-----	79

まえがき

檜田美雄 (HCB00537@nifty.ne.jp)

この報告書は、障害者スポーツにおける社会秩序の相互行為分析をテーマとして行った1999年度徳島大学総合科学部開講科目「社会調査実習」（国際社会文化研究コース・現代国際社会分野の義務的履修科目）の報告書『障害者スポーツの相互行為分析』である。

調査に協力していただいた、X県の盲人卓球グループ、X県車椅子バスケットボールクラブ、X県ろう者バレーボールサークル、X県身体障害者水泳サークルの選手およびコーチ・監督の方々に感謝したい。また、歴史的な資料の複写許可を含めて、情報入手に関する便宜供与をして下さった日本身体障害者スポーツ協会、日本身体障害者水泳連盟、徳島県ノーマライゼーション協会の関係各機関のスタッフにも謝意を表したい。さらに、1999年8月の二度にわたる徳島合宿において障害者スポーツに関する様々な分析上の指針を提示してくれた岡田光弘（筑波大学体育科学研究科）、金澤貴之（筑波大学心身障害学系）、中野聡子（筑波大学心身障害学研究科）の三氏にもお礼の言葉を申し上げたい。とりわけ、中野聡子氏からの指摘（ろう者バレーボールにおいて、聴者とのコミュニケーションがスムーズにいつているように見えるのは、ろう者が聴者に配慮しているからであって、その部分を考えずに日本手話の必要性は低い、と結論づけてはいけない等）は、実習の後半の方向性を決める指摘であった。今回の報告書に掲載した論文が、中野氏からの批判に最終的に答え得ているかどうかについては、十分な自信はないが、答えるべく努力は行った。11月にはマッキーブニーの論文を全員で精読し、「epidemic（固有）な文化」の可能性について、考察を深めた^{*1}。また、ろう者バレーボール班のメンバー（プラス希望者）は、清原健司・嘉美両氏の協力の下、初級レベルではあるが「手話の会」を作り、時間外に手話学習を行った。できる限りのことは行った、と言えるのではないだろうか。

以下、各論文の簡単な紹介をもって『まえがき』とする。

第一論文「ルールの運用からみる盲人卓球」は、盲人卓球がそれ自身として固有のゲーム性（おもしろさ）を持っているかどうか、持っているとするのならば、どのような形でそれを持っているのか、ということを読み明かそうとした論文である。結論としては、盲人卓球は、通常の卓球と同じ台を使いながらも、通常の卓球とは違った戦術・戦略に彩られており、「別のゲーム」である、と言えるということ、それから、その固有性は、「障害者スポーツ」の枠から「盲人卓球」を解放する可能性を導くものであること、この二点

*1 このテーマの重要性に鑑み、檜田・金澤・岡田の3名は、以下のようなタイトルで討議集会を開催するよう『筑波社会学会』事務局に申し入れている。申し入れが採用された場合には、2000年4月22日に筑波大学で行われる「筑波社会学会定例研究会」の一部として、金澤と檜田を発題者、上農正剛氏（九州保健福祉大学）をコメンテーター、岡田を司会者としたミニシンポジウムが開かれることになるであろう。関心のある向きは3月以降、檜田の方で情報提供が可能なので、問い合わせを欲しい。

シンポジウム名：ろう文化と社会学 ― 聴者によるろう文化理解は果たして可能か？ ―

が主張されている。

第二論文「車椅子バスケットボールとはどのようなスポーツか？」も、第一論文同様、障害者スポーツとしての車椅子バスケットボールが、それがベースとしているとされる通常のバスケットボールとどのように同じで、どのように違っているのか、という点に焦点を当てて書かれている。結論としては、「同じ」と見える部分もその成り立ちを詳細に見ていけば、「車椅子」であることに基づいており、逆に「違う」と見える部分もその成り立ちを詳細に見ていけば、「バスケット」であることに基づいている、ということが発見された。本質主義的分析では見落とされてしまう「構成の入れ子構造」の発見は、エスノメソドロジ的研究として評価できるのではないだろうか。

第三論文「ろう者バレーボールにおけるカスケーディングとソーシャル・リフレクション」は、前の2つの論文とは異なり、マッキープニーの先行研究に深く依存した研究となっている。しかし、結論としては、ただ単にマッキープニーがフィンランドのろうコミュニティで発見したコミュニケーションスタイル（視覚のみに依存して情報が伝達される様式としての「カスケーディング」と「ソーシャル・リフレクション」）が、日本でも存在する、ということだけではなく、そのマッキープニーの発見の意味づけにまで踏み込んだ考察を行っている。この部分は短くはまとめがたいが、簡単にいえば、エスノメソドロジ研究としての「ろう文化研究」の方向としては、相互作用の独自性（文化？）を、そこで使われている手段を物象化した形で、技術主義的に要素分解的に把握・紹介する方向ではなく、それを「相互反映性」の重要性に則りながら「期待・予期の構造」として把握・紹介する方向の方が、望ましいという主張を行っているのだと言えよう。データ中に含まれているかもしれない日本手話を見落としている危険性は重々承知している。が、その上で、理論的にいい得るぎりぎりの主張として彼らの主張は容認できるのではないかと思っている。

付録の第二章に掲載している、阿部智恵子のインタビュー記録「障害者スポーツと人生」は、上記の三研究とはべつに、阿部が樫田や岡田と行った「障害者水泳」に関する共同研究の成果である。主要部はインタビューの記録であるが、阿部のコメントにも見るべきものがあると言えよう。たとえば、障害者にとっての生き甲斐としてのスポーツの価値については、石田氏や松木氏へのインタビュー記録（および、それらについての分析）が参考になるであろうし、障害者というカテゴリーに属しながらも、「障害者の指導者」というサブカテゴリーを自分に当てはめることで自尊感情を満足させる「様式」については、岡本氏のインタビュー記録が有用である。この研究は、一種のセルフヘルプ・グループとして「障害者スポーツ」を捉える研究として今後も続けていくべきであろう。

まだまだ書きたいことは多いが、報告書の価値は個別の研究対象に関する分析の切れ味で判断されるべきであろう。私の解説はここまでとしたい。

さいごに、このたった6単位の調査に、当該期間の大学生活の何割もの労力をつぎ込んでくれた学生諸君の努力を「ほとんど奇跡のようだ」と評価していることを今年も記して、前書きを終わりたい。

※なお、本研究は、平成11年度文部省科学研究費・奨励研究A（研究代表者：樫田美雄、研究課題名「障害者スポーツの可能性」、課題番号11710103）の一環である。また、研究の成果は2月15日午後1時から徳島大学総合科学部ゼミ17室で行われる発表会において、ビデオクリップ付きで発表される予定になっている。

第I部 本文を読む前に

トランスクリプト記号一覧・配置図

記号の説明 以下に示すものは、この報告書のトランスクリプトで用いられている記号である。これ以外の記号が用いられている場合は、その都度当該トランスクリプトにおいて、必要に応じてその意味が記されている。

／／ 複数行の同じ列におかれた二重スラッシュ：参加者たちの言葉の重なりが始まる個所を示す。

= 言葉と言葉の間、もしくは行末と行頭におかれた等号：途切れなく言葉がつながっていることを示す。

() 丸括弧：何か言葉が発せられているが、聞き取り不可能であることを示す。また聞き取りが確定できない場合は、当該文字列が丸括弧で括られる。

(数字) 丸括弧で括られた数字：その数字の秒数だけ沈黙のあることを示す。また、0.2秒以下の短い間合いは「()」という記号で示される。

: コロンの列：直前の音が延ばされていることを示す。

- ハイフン：直前の言葉が不完全なまま途切れていることを示す。

[] すみつき括弧：参加者の発話以外の諸行動の一部を示す。

h h h h の列：呼気音を示す。

| | | 各発話の上におかれた同一文字の列：その文字（I）で示された特定の事物もしくは、人物に視線もしくは顔が向けられていることを示す。

... ピリオドの列：動作が始まりかけていることを示す

, , , , カンマの列：動作が終わりかけていることを示す。

n o d : 頷きを示す。

【1999年度 調査日程表】

盲人卓球班

- 5月25日 参与観察…練習に参加するなど
6月15日 参与観察
22日 参与観察
7月 6日 参与観察、ビデオ撮影
31日 盲人卓球の県大会 球拾いとして参加
9月21日 参与観察
28日 参与観察
10月19日 参与観察
11月 6日 参与観察、ビデオ撮影
14日 参与観察
27日 参与観察

車椅子バスケットボール班

- 5月20日 観察
6月24日 観察
7月 1日 観察
7月 8日 ビデオ撮影
8月29日 ビデオ撮影
11月28日 第29回内閣総理大臣杯争奪 日本車椅子バスケットボール選手権大
会 地区予選大会 ビデオ撮影

ろうバレー班

- 6月25日 参与観察
7月 9日 参与観察
12日 参与観察
16日 参与観察、ビデオ撮影
8月 9日 参与観察
27日 参与観察、ビデオ撮影

1999年6月29日

調査協力のお願い状の例

徳島大学総合科学部学生 大谷^{たかし}崇
石村典子
濱松真理子

私たち大谷、石村、濱松の3人は、徳島大学総合科学部人間社会学科に所属する学生で、いま社会学を勉強しています。この度は、皆様が行っている盲人卓球について、その活動の見学及び資料収集の許可をお願いしたいと思い、書面でのご挨拶というかたちを取らせて頂きました。

私たちは今「社会調査実習」という授業の中で、障害者スポーツをテーマに勉強をしています。今まではもっぱら「医療」や「福祉」といった視点から眺められることが多かった障害者スポーツですが、近年その競技性の高まりを伴った普及とともに、ひとつの「スポーツ」として、「生活」の一側面として、障害者スポーツをとらえようとする動きが広がっています。私たちは、そのように「医療」や「福祉」と言った視点から少し離れて障害者スポーツを見ることで一体何が得られるであろうか、その点に研究心を持って、今回のような障害者スポーツ研究を計画しました。そして私たち3名は、競技の面白さを強く感じた盲人卓球を研究したいと思ったのです。

私たちが具体的に行いたいと考えているのは、皆様の日々の練習や試合風景の見学・観察・私たち自身の参加です。これにはビデオ・カメラによる撮影も含まれます。また、その際見学から得られた知見や収集した資料については、研究以外の目的に使用することはいたしません。ただ、我々は研究を通して得られた知見が、何らかの形で障害者スポーツの普及・発展に貢献するものでありたいと考えておりますので、その意味で研究成果を冊子体の報告書にし、かつ報告会を開くといったことを予定しております。しかしその場合にも、皆様のプライバシーの保護について、名前の匿名化等を用い、できるだけ配慮を尽くすことをお約束いたします。

以上のような次第でございます。どうか、私たちに皆様の活動の見学と資料収集をお認め下さいますよう、重ねてお願い申し上げます。

<連絡先> 徳島大学総合科学部人間社会学科 国際社会文化研究コース
現代国際社会分野所属 四回生 大谷崇
[住所]
[電話]

第Ⅱ部 本文

第1章 ルールの運用からみる盲人卓球

盲人卓球班

0. 障害者スポーツ——社会学の視点から——

わたしたちは、スポーツを楽しむ。そのスポーツの楽しみ方は、時に観戦であったり、時に直接にスポーツをすることであったりと様々である。私たちが普段に親しんでいるスポーツとは、野球・バスケットボール・水泳など健常者がするスポーツを目にすることがほとんどであろう。

オリンピックの後にパラリンピックが開催される。パラリンピックでの障害者がスポーツに取り組んでいる姿を見たことがあるだろう。障害者がするスポーツとは、健常者のするスポーツとは違うこともある。障害を考慮して、ルールや道具を健常者のするスポーツとは変化させたり、健常者のするスポーツをベースにした新しいスポーツがあるためである。

障害者スポーツについて簡単に説明する。障害者のするスポーツを障害者スポーツということは出来ない。なぜなら、障害者がスポーツをしたからといって、そのスポーツが障害者スポーツであるとは必ずしも言えないからである。詳しくは、第2節にて触れる。障害者スポーツは、ディサビリティ (disability)・スポーツともいわれる。ディサビリティとは、「身体的なインペアメントを持つ人のことを全くまたはほとんど考慮せず、したがって社会活動の主流から彼らを排除している今日の社会組織によって生み出された不利益または活動の制約」(長瀬[1999:15])である。つまり、障害者スポーツは、社会的認知が薄く、また障害者が主体となっていることから、スポーツをすることへの人々の理解が得られていないという現状を示し示す。

障害者スポーツとして、具体的にどのようなものがあるかということ、それは多種多様であるが、ゼミナールの他班が研究した車椅子バスケットボール、ろう者バレーボール、そして我が班の研究対象である盲人卓球を挙げることができる。前者2つについては、別に詳細に触れるので、ここでは触れない。盲人卓球について触れておく。盲人、つまり視覚障害者が卓球をベースに変化を加えたのが盲人卓球というスポーツである。

障害者スポーツといっても、身近なものとして感じることは難しいかもしれない。わたしたちはスポーツを楽しむ。健常者がスポーツを楽しむように障害者もスポーツを楽しむ。しかし、障害者スポーツならではの特徴を挙げることができる。たとえば、障害者スポーツは大会設立の歴史をみると、その目的の主要部分がリハビリであった。なるほど、体の一部に障害を持つと、その他の体の部位まで影響を与えたり、障害が更に進行したりすることがある。その悪影響を防止する働きがリハビリにはある。リハビリをスポーツの中に取り入れることによって、楽しみながらリハビリをすることが可能になる。スポーツという形に変えることによって、障害者がリハビリに取り組む際に生じるストレスを多少は解消する。このような理由から、最初はリハビリを念頭において障害者スポーツがおこった。障害者スポーツの在り方は、変化を続けている。今日では、従来のリハビリや福祉の視

点からばかりではなく、より楽しめる、あるいは競技性の高いスポーツをも目指して障害者スポーツは変化を続けている。

では、障害者スポーツが障害者にはどのような影響を与えているのか。個人レベルと社会レベルで見てみる。まず、個人レベルで見る。『第31回全国身体障害者スポーツ大会調査報告書』のデータ（藤田[1998:71]）をみる。すると、「図3-2 スポーツをやっていちばんよかったこと（側面別）」では、以下のようになっている。

図1 「スポーツをやっていちばんよかったこと（側面別）」

1 社会的メリット	36.8%	
2 スポーツ固有のメリット	23.8%	
3 精神的メリット	13.5%	
4 身体的メリット	13.3%	
5 その他	1.2%	計88.6% (元図は円グラフ)

最大のメリットとしてあげてある社会的メリットとは、具体的には「図3-1 スポーツをやっていちばんよかったこと」の項目から、「友人が増えた・スポーツ外外出増・周囲の理解」（藤田[1998:71]）があてはまる。ともすれば、障害者は障害を抱えるために、家や施設に閉じこもりがちである。人間とは、社会的動物である。だから、障害者はいろいろな人と接することで何よりの大きな喜びを得たといえることができる。次に2番目にあがったスポーツ固有のメリットについて分析する。具体的には、スポーツの上達などである。このメリットは、健常者がスポーツをやってよかったことにも上位に挙げると考えられるだろう。次に社会レベルで見る。障害者スポーツがさかんになると、障害者への社会的視点を高める。

障害者はどう捉えるのか。2つの立場がある。1つは、ノーマライゼーションやバリア・フリーの政策をとる政府の立場であり、もう1つは、障害を個性として捉える障害個性論の立場である。前者は、「社会を障害者が同化しやすい形にデザインしなおすこと」（石川[1999:71]）を行い、障害者にも優しい社会を目指す。一方後者は、前者の欠点を「障害者の同化にはおのずから限界がある」（石川[1999:71]）と指摘する。後者は、健常者がマジョリティとして、マイノリティとしての障害者を抑圧しているという理解図式と対になる。この理解図式のもっとも先鋭的立場にあるものとして、木村や市田のろう文化が当てはまるだろう。障害者が、「内なる健常者幻想」（倉本[1999:245]）を消し、障害に新たな価値を見出す。これが障害者へ同情ではないまなざしを取り戻すことでもある。

障害者スポーツに注目するのは、障害者スポーツが社会を変える大きな力を秘めていると考えるからである。

佐藤充宏によると、スポーツの持つ身体的意義は、次の3つに区分することができる。

図2 「スポーツの持つ身体的意義」

- 1 治療・リハビリテーション
 - 2 健康維持
 - 3 身体的表現・リラクゼーション
- 」（佐藤[1997:16]）

障害者スポーツはようやく、治療・リハビリテーションから脱却して、身体的表現・リラクゼーションに注目しはじめた。つまり、競技性の高いスポーツにも焦点を合わせる。この訓練から趣味のスポーツとしての流れは、障害者たるプレーヤーにとってのスポーツを楽しむ幅の広がりという意味する。趣味のスポーツは障害の克服のみを意味しない。野球大好き少年に肘を壊すほど、身体を痛めつけてまでも打ち込む自由があるように、障害者にも人生や身体をかけてスポーツをする自由が認められつつあるということを示す。福祉を越えたところで、スポーツをする自由を与えられるということである。しかしながら、現実には社会的認知が低いため、スポンサーがいなかったり、施設がないか不備だったり、健常者のボランティアの手が必要であったりと自立してスポーツを楽しむという地点には、まだまだ遠い。

おわりに、著者が障害者スポーツに取り組む理由を述べる。前述したように、障害者スポーツがよりよい社会に変えていく力を秘めているものであるということと関連している。すばらしい可能性を持っているにもかかわらず、障害者スポーツは社会的注目を得ていない。また、徐々に注目されつつはあるものの、福祉くさい・リハビリくさいものとして扱われるに過ぎない。これまでの障害者スポーツ研究では、大きく分けて2つの視点があった。福祉医療の視点からは、障害者スポーツがリハビリに役立つかという目的をめざすにすぎない。スポーツ科学の視点からは、障害者にもスポーツの喜びを与えようという目的を目指すにすぎない。この2つの視点では、第2節に詳細を示すが、障害者スポーツの捉え方として「①障害者がする ②障害者用にルールが変えられている ③障害の無意味化するルールが作られている」の3分類のうち、せいぜい①②を示すのみで、③を示さない。③を主張する立場から障害者スポーツを提示するには、社会学的手法がとりわけ有効であると判断した。障害者スポーツをもっと広い視野で見えていく。

それでは、この章では盲人卓球をルールが実際にどのように扱われているかを見ることで、盲人卓球とは何かを示す。

1. 構成的ルールに見る盲人卓球

球技において、通常、視覚は非常に重要な要素とされる。ボールを認知する場合、視覚を利用するからである。しかし視覚障害者の特徴として、特に視力の低いものは空間でボールをとらえることが困難である。そこで音がでるボールを利用して、視覚的認知（目で見て確かめること）の代わりに、音（聴覚）を利用して平面で行う競技が考えられた。盲人卓球はボールを転がし、ネットの下を通して打ち合うゲームで、卓球とは著しく異なる。盲人卓球の起源について『全国身体障害者スポーツ大会競技規則の解説』では以下のように述べている。

世界盲人百科事典によると、「栃木県足利盲学校長の沢田正好が視力障害者の神経の働きや身体の動きなど、感覚訓練の一つともなる盲人用ピンポンを創案し、1993年の帝国盲教育研究大会の際発表した、そのルールがだいたい現状のものに近

いものであったことからみて、沢田が盲人卓球の創案者であったかもしれない。」とその起源について記しているが、このゲームを誰が考案し、いつ頃から行われるようになったかは明確でない。(財団法人 日本身体障害者スポーツ協会(編) [1996:34])

盲人卓球は日本だけのものであり、今のところ日本でしか大会は開かれていない。そのことの一部は卓球とテーブルテニス (table tennis) の言葉の意味上の違いで説明できる。日本語でいう卓球とは「卓(台)の上で行う球技」という意味で卓球と呼ばれるのであり、ボールがはねている必要はない。テーブルテニスとは「テーブルの上で行うテニス」という意味で、ボールがはねるというテニスの性質を含んでいる。だから、盲人卓球は「盲人が行うテーブルテニス」ではなく「盲人が卓(台)の上で行う球技」という意味なのである。オーストラリアでは盲人卓球によく似た競技があるが、それは「スウィッシュ (SWISH)」(財団法人 日本身体障害者スポーツ協会編 [1996:35]) と呼ばれている。盲人卓球は、テーブルテニスの、いわゆる「ピンポン (ping-pong)」⁽¹⁾ といわれるような要素は引き継いでいないが、テーブルテニスを「卓(台)の上でする球技」ととらえた日本で卓球を参考に盲人卓球が生まれたのである。実際、コート広さ、ラケットの形、ピン球の大きさや材質など卓球を引き継いでいる部分も多い。とはいえ、盲人卓球は競技の性質、楽しさなどが卓球とは全く違い、一つの新しいスポーツである。そしてそう捉えると、もはや競技者は盲人だけに限られるべきではない、ということを強調しておきたい。

盲人卓球は、音によるボールの認知という性質のため、そのルールも卓球と異なる部分が多い。注目すべき点は、それらのルールが、盲人卓球固有の戦術に結びついている点である。そして戦術こそがスポーツの楽しさと深く関係している。盲人卓球固有の戦術については第3節で具体的に述べる。盲人卓球のルールを、盲人卓球を構成しているという意味で「構成的ルール」と呼ぶ。盲人卓球固有の戦術を、構成的ルールに対応するものとして「選好ルール (preference rule)」と呼ぶ。選好ルールは、いわゆるセオリーのことである。たとえば野球において、一塁、二塁、三塁、ホームベースの順番で走らなければならない、決して三塁、二塁、一塁、ホームベースの順番で走ってはならないというルールは構成的ルールであり、フライが野手に捕球されると同時に、塁上の走者が次の塁に向かって走ってよいというタッチアップ (touch up) は選好ルールである。ガーフィンケル (Garfinkel) はその著書 (Garfinkel [1963]) の中で、「構成的期待 (constitutive expectancies)」という言葉を使用し、ルールに従うということがいかなることかを解説している。

構成的期待とは

- (1) プレーヤーの立場からすると、プレーのあり得る領域から1つのルールセットを枠づけるものであり、プレーヤーの願望や環境や計画や関心や……選択の結果に関わりなくプレーヤーがそれを選ぶと期待するものである。
- (2) プレーヤーは……選択肢の同一のセットが自分を拘束するのと同様にほかのプレーヤーも拘束することを期待する。
- (3) プレーヤーは、自分が上述のことを他者に期待するように、他者も自分にそのことを期待することを期待する。

この3つの特徴を構成的期待と呼ぶ。(Garfinkel [1963:190])

構成的期待を含んだルールのことを我々は構成的ルールと呼ぶ。盲人卓球が成立するためには構成的ルールは不可欠である。構成的ルールは、盲人卓球の競技規則で定められているすべてのルールであり、先に述べたようなコートの広さ、ピン球の大きさといった卓球を引き継いでいるルールも含んでいる。一方、選好ルールは、そのルールに従わなくても盲人卓球は成立するが、選ぶことが望ましいというルールである。以下、盲人卓球の構成的ルールをいくつか取り上げ説明する。

1つ目は、卓球台(写真1、2)についてである。ボールを転がして競技をする性質上、コートに継ぎ目があるとボールが正常に転がらないため、平坦かつ継ぎ目がない自他領コートを含めて一枚板と定められている。コートの寸法は卓球と同一の規格であり、ネットからエンドラインの距離は1メートル37センチ、自他領コートをあわせてもせいぜい3メートルである。音を頼りにボールを認知する盲人卓球においては、空間的に音を拾いやすい広さといえるだろう。エンドフレームのコート面と反対側の側面の中央には、小さな凹凸物がある。またセンターラインは手で触れるとわかるようになっている。プレーが始まる前のみそれらに触れることができ、台と自分の位置を確認できるようになっている。盲人卓球の台にはサイドフレーム、エンドフレーム(写真3)がついており、プレーヤーの打った球は、エンドフレームにあった後、一度コート内かプレーヤーの手に当たらなければアウトになる。もしエンドフレームに当たった球をすべてインにし、打った側の得点にしてしまえば、ゲームは非常に単調なものになってしまうだろう。インに上記のような制限を与えることで、ラリーが続くようにし、より深みのあるプレーを生み出すようにしている。

ネットは卓球と長さ以外同じ規格のものを上下逆さにして使用する。卓球ではネットの上を越すように打つが、盲人卓球では、ネットの下を転がすように打つ。ネットの下縁がコート上から4センチの高さになるように張る。盲人卓球では、先にも述べたように空間でのボールの認知が困難であるということと、音が非常に重要になるということで、浮き上がる球(=転がる音がしない球)はネットに引っかかるようにされている。サポートはボールの進行を妨げないように取り付けられている。

2つ目は、ラケットとボール(写真4)についてである。ラケットは卓球で使用するもの(市販されているラケット)と材質、形状、大きさは同じであり、そのラバーをとったものである。ペンとシェイクがあるが、盲人卓球ではコート上でボールを転がせる打ち方のため、ペンとシェイクによる握り方の差異はみられない。ボールは金属球が入ったプラスチック製のもので、転がると音がする。大きさと材質は卓球で使用するものと変わらない。

3つ目は、アイマスクの着用についてである。盲人卓球の対象者は、弱視の人、全盲の人であるが、どちらもアイマスクの着用が義務づけられている。試合が始まってから終わるまで審判の許可なしにアイマスクを外すことはできない。

4つ目は、サービスについてである。サーバーが「いきます」といってから5秒以内にレシーバーが「はい」と答え、そこから5秒以内にサーブをしなければならないというルールがある。卓球ではサーバーがサービスのモーションに入ることをレシーバーが目を確認し、自動的にプレーがスタートする。しかし盲人卓球においてはプレーが始まるという

ことを音声で確認しあわなければならない。

5つ目は反則についてである。ダブルヒットと呼ばれるような二度うちや、ホールディングと呼ばれる押し出すような打ち方は反則とされている。ホールディングの判定は難しく以下のように定められている。

(1) サービス時のホールディング

- ①打ち出す前にラケットとボールが触れ、その後、押し出すように打ち出した場合。
または、打ち出す前より、打ち出した後の方があきらかにラケットを振るスピードが速い場合。
- ②打ち出すときにラケットとコートの上にボールがはさまれ、そのまま押し出すように打ち出した場合。
- ③ボールを打ったときの打球音がしない場合。

(2) リターン時のホールディング

- ①打ち返す動作をおこす前にボールがラケットに触れ、その後、押し出すように打ち出した場合。
- ②打ち出すときにラケットとコートの上にボールがはさまれ、そのまま押し出すように打ち出した場合。
- ③身体の正面の範囲から離れたボールに対応したときなど、弧を描くようなスウィングで打ち、その結果、打球コースが大きく変わったような場合。
- ④ボールを打ったときの打球音がしない場合

(財団法人 日本身体障害者スポーツ協会(編)[1996:38-39])

ホールディングは本来、盲人卓球を公平に視覚障害者に楽しませるため、盲人卓球で重要な音を保護したと考えられる。しかし審判は聴覚的な判断に加え視覚的な判断によっても判定する。徳島大学の社会学特別講義『障害者スポーツと社会 — 盲人卓球の過去・現在① —』において、盲人卓球のプレーヤーである池田氏の指摘をまとめると「視覚障害者ではない審判が目で判断することと、審判が公的な資格ではなく経験に基づくものであることから、ホールディングの取り方が人によってバラバラであり、視覚障害者には不可視の領域で審判が正しいのかどうかさえ確かめられず、プレーヤーにとっては非常に不満なものだ。」(岡田・近藤・池田・樫田 [1998]) ということである。

写真1「卓球台」

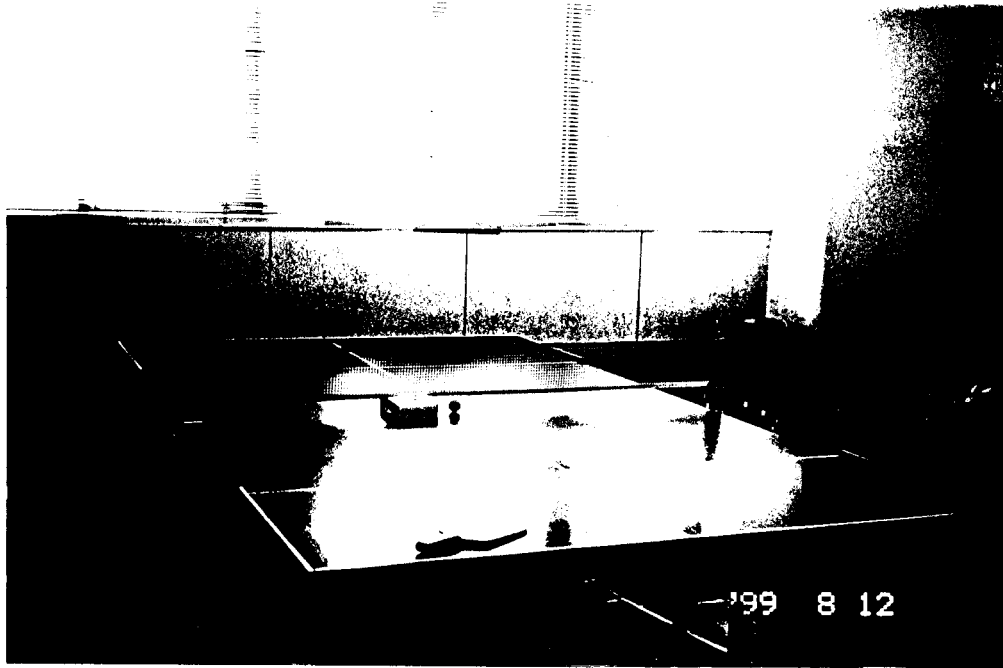


写真2「一枚板の卓球台」

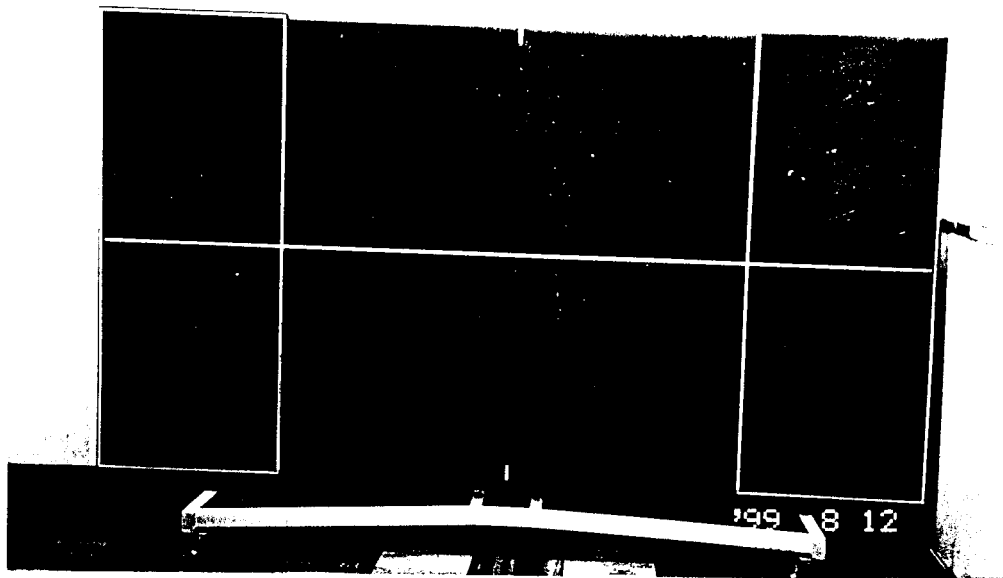


写真3「フレーム」

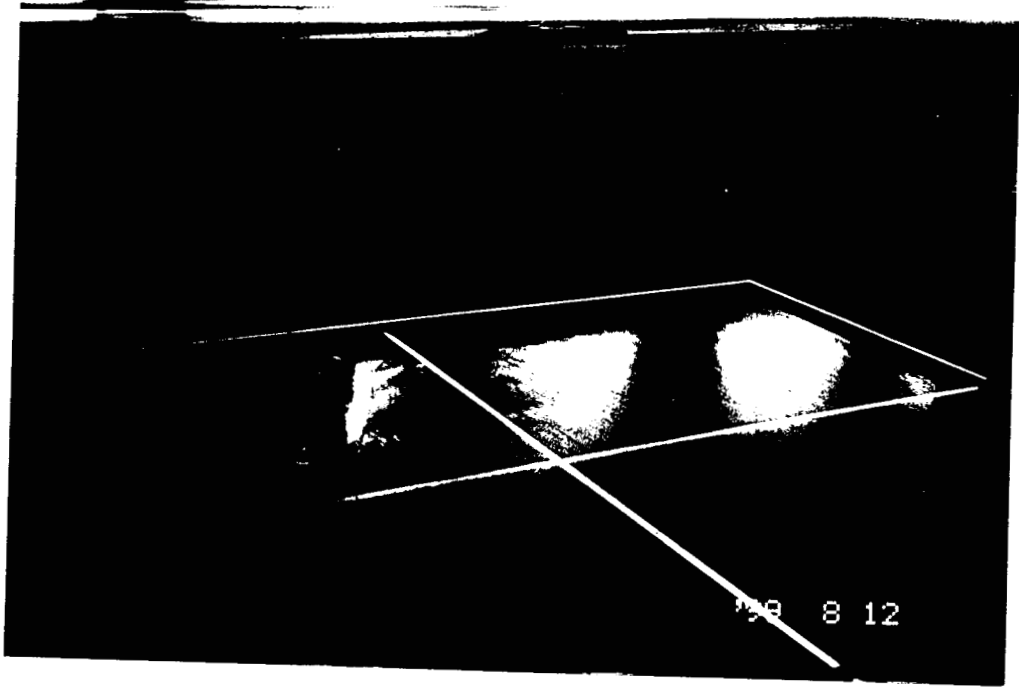
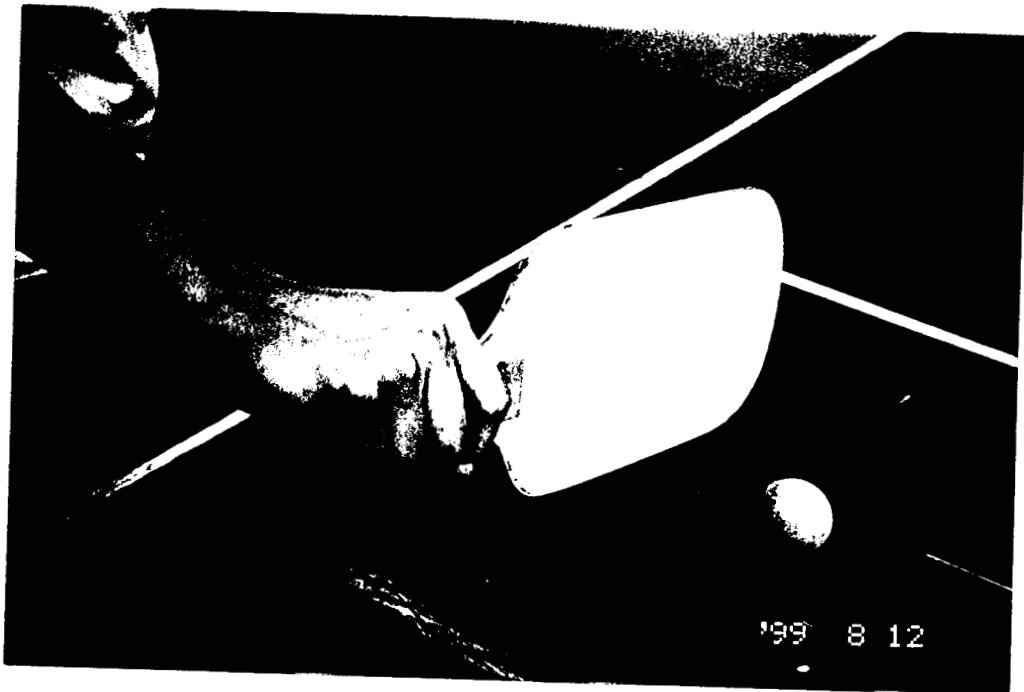


写真4「ラケット、球」



2. 障害者スポーツとは

我々の研究する障害者スポーツとは、一体何を指してそう言うのか。この問題を考えるにあたって我々は次の3つを志向する。

- ①障害者がするから
- ②障害者用にルールが変えられているスポーツのこと
- ③障害を無意味化するようなルールが作られているという意味で障害者スポーツである

おそらく現在の障害者スポーツは、①～③の混じり合ったものであると我々は考える。それでは、我々の対象とする盲人卓球において、実際に検討してみよう。

まず①の「障害者がするから『障害者スポーツ』である」という主張からだが、確かに盲人卓球の正規の試合は、「視覚障害者」のみを対象にしている。故に「障害者がする障害者スポーツ」という位置づけも可能である。しかしそう単純ではなく、盲人卓球は視覚障害者だけのスポーツであるわけではない。公式試合の参加資格が視覚障害者にしかないとはいえ、視覚障害者でなくてもプレーすることは可能である。「障害者がするから『障害者スポーツ』である」というなら、我々学生やその他の健常者、また視覚以外に障害を持つ人がアイマスクを着用し、盲人卓球のルールに則ってゲームを行った場合、そのプレーは盲人卓球ではないということになる。同じスポーツをしているのに何故名称が違うのか。もう一つ逆を考えてみよう。もしも、内臓に疾患を持つ人が卓球をしたら、それは内臓疾患卓球になるのだろうか。この論理でいくと、右腕切断の人が行う野球は右腕切断者野球になり、下半身麻痺の人が行うテニスは下半身麻痺テニスになる。極端な例を挙げれば、視覚に障害を持ち、更に内臓に疾患を持ち、左指切断の人がいたとすると、その人が何かスポーツをするたびに、それは内臓疾患左指切断盲人スポーツ、となるのである。

この指摘は、障害者スポーツと障害との結びつきをどのように考えるかという問題を浮上させる。先に例で挙げたように、「ある障害者がそのスポーツをするからこそ〇〇（障害者）スポーツである」とする帰結は、障害に固執しすぎており、スポーツの内容と関係ないところで名前が決まっているのである。それは、ある特定の部位における限定された障害に結びついた形で「障害者」を位置づけ、一方で、考えられ得るすべての「障害者の行為」を障害と結びつけて考える、という枠組みにとらわれている。スポーツで考えなくともよい。障害者が行う行為は全て「障害者の行為」になるのである。「障害者がするから」とはすなわちそういうことだ。そのような思考は我々の望むところではない。「障害者がするから」という理由では、障害者スポーツを語ることはできない。

次に②の「障害者用にルールが変えられているスポーツのこと」という考えだが、その基本は、健常者がやっているスポーツをそのまま障害者がやるのは、体力その他の要因からきつい。そこで障害者ができるように、ルールを変えて配慮をする、という含みである。これについては具体的な例を挙げて検討していきたい。さて、盲人卓球における障害者用のルールには、たとえば、「いきますーはい」のルールがある。サーバーの「いきます」、レシーバーの「はい」によって、初めてゲームがスタートする。一方卓球の場合では、サ

サーバーが何時サービスを行うのか、レシーバーが目で見確認し、自動的にプレーがスタートする、ということになっている。卓球でも盲人卓球でも「今からプレーに入る」という確認が為されているわけだが、卓球が視覚を用いて行っているのに対し、盲人卓球は音声による確認という手段をとる。それは目の見えない視覚障害者のためのルールである。ほかにも、本章第1節で紹介したように、サーブ時に中央線の確認をするための溝（突起物）に触れて良い、音で状況が判断できるように、ピン球に鉛の玉を3個入れるなどが、この分類にあたるだろう。しかしこの指摘は、後で述べるように、その意味を変えていくことになる。

③の「障害を無意味化するようなルールが作られている」というのはどうだろうか。盲人卓球における障害の無意味化とは、すなわち「アイマスクを使った視覚そのものの無意味化」である。全盲であれ弱視であれ、あるいは健常者であれ、みな一律にアイマスクの着用を義務づけることにより、視覚能力の違いは無意味なものとなる。確かに、実際の視る能力の程度、視覚を失った時機によって、盲人卓球のプレーにおける熟練のスピードや習熟度に差異が生じるという言葉はしばしば耳にした。たとえば、大柴の指摘の要旨を示すと、「生来目の見えない人は、確かに長く視覚を閉ざした経験から、視覚以外の諸感覚は非常に優れている。しかし、その運動経験が中途障害の人と決定的に異なっているのである。それゆえ、中途障害や、あるいは少しでも視力のある人の方が、結果的にその運動経験の広さによって早く上達していく」（岡田・大柴・檜田[1998]）ということであった。このように、一人一人のプレーヤーによる個人差は否めないのだが、しかし、いま、ここで盲人卓球をプレーするのに、彼らの間に差異など無いという前提こそが、問題となっている「無意味化」であろうと考える。

さて、ここで先程予告した②との関連を考察してみよう。我々は「いきますーはい」等々の例をあげ、それをもって「障害者用にルールが変えられている」ことの証明とした。しかし、盲人卓球はアイマスク着用のルールによって障害を無意味化するのである。無意味化された後に残るのはひとりのプレーヤー。つまり、この障害の無意味化がされた後では、「いきますーはい」や「溝を触る」などのルールは「障害者の為のルール」、すなわち②のような考えから「盲人卓球をする者の為のルール」へと変わるのである。この転換は「障害者がするから」「障害者のために」といった従来の発想に並んで、障害者スポーツ研究の面白さを飛躍させるものであると我々は考える。それは何故か。

考えてみてほしい。「障害者がするスポーツ」「障害者用にルールを易しくしている（配慮がある）スポーツ」をもって障害者スポーツとするのは、その発展性を著しく阻害した考え方になり得るのである。前述したように、「障害者がしているから」という位置づけは、正規の試合における「視覚障害者」以外のプレーヤーを除外し、またいたずらに「障害」を強調するだけのものである。一方、「障害者用にルールを易しくする」という発想は、障害者スポーツが持ちうる高度な競技性を始めから否定するおそれがある。なぜなら、この考えの根底には「障害者でもできるように」という障害者保護的発想が存在しているからである。ゆえに、「障害の無意味化」という第3の概念のもつ思考の広がりや、我々は興味深く感じるのである。

このように、盲人卓球はアイマスクによって障害の無意味化が為されたスポーツである。しかし完全に無意味化されていない部分がある。たとえば盲人卓球では、現在は必ず健常

者の審判を必要とする。それは、最終的にはアイマスクを着用したプレーヤーのみでは、正確な勝ち負けを判定できないためである。イン、アウトの判定は勿論、ホールディングの判定法もまた「視覚」の利用を必要とするものなので、完全な視覚能力の無意味化は為されていない。もしも、「健常者の」審判が必要であるといった障害・非障害の対カテゴリーをなくすとしたら、電気信号を利用したアウト、インなどの判定といった審判の手段が考えられるだろう。が、現在のところ、とりわけ健常者審判によるホールディングの判定の不公平性について、非常に問題を抱えている。この話については次節以下で述べることにしよう。

さて、ここまでどのように障害者スポーツを規定するのかという話をすすめてきたが、ここで、また別の角度から、今ひとつの分類を用いて障害者スポーツを語っていきたいと思う。我々は、障害者スポーツの在り方として、インテグレイティッドスポーツ(integrated Sports)、ニューミックス(new mix)、リバーズインテグレイション(reverse integration)という3つの関係を提示したい。簡単に説明すると、まず、インテグレイティッドスポーツとは、既存の健常者のスポーツに似せてつくられた障害者スポーツを指す。次に、2つ目のニューミックスとは、障害者と健常者が同時にプレーできるようなスポーツを表している。たとえば、テニスのニューミックスでは、車いすのプレーヤーと健常者とがペアとなり、健常者はワンバウンドで、車いすのプレーヤーはツーバウンドまで打ち返せる、というルールで一緒にプレーする形式がとられている。そして障害者スポーツに健常者スポーツが接近して作られるのが、リバーズインテグレイションである。(2) (下図参照)

図3 「インテグレイティッドスポーツ、ニューミックス、リバーズインテグレイション」

- (1) インテグレイティッドスポーツ：健常者のスポーツに似せて障害者スポーツがある
↓↑
(2) ニューミックス：障害者と健常者が同時にプレーできるスポーツ
↓↑
(3) リバーズインテグレイション：障害者スポーツに健常者スポーツが接近する

ここでまず、インテグレーション(integration)という言葉に注目してもらいたい。インテグレーション、統合、統合教育をそれぞれ辞書で引くと、以下のように解説されていた。

- ・インテグレーション「統合という意味であるが、普通、障害児教育で“統合教育”の意味で使われる。」(上田・大川(編)[1996:29])
- ・統合「(integration) ①多数の個々の機能が、1個のより高次の秩序のものに統合されること。②=インテグレーション。」(上田・大川(編)[1996:421])
- ・統合教育「(integrated education : mainstreaming) 心身障害児を普通学級で健常児とともに学習させ、必要に応じ特別の指導も行うこと。」(上田・大川(編)[1996:421])

しかし、実際に近年まで行われてきた「統合(教育)」には、ややもすると障害者の方に、より歩み寄りを求める傾向が存在していた。インテグレーションの本来の意味は一方から他方への方向性を持つものではない。しかし、インテグレーションが統合(教育)として、障害者を健常者に同化させようとしてきたという、社会的・時代的背景を背負うもの

であることを考慮すれば、インテグレーションという語は、やはり、方向性を帯びたものとして解されるべきであろう。それゆえ、リバースインテグレーションという逆説が成立するのである。同じ考えで、「統合」を表すには、インクルージョン(inclusion)が適切かと思う。インクルージョンの辞書的な意味は「包含、包括という意味であるが、障害児教育ではより深まったインテグレーションという意味に使われることがある」(上田・大川(編)[1996:27])というもので、社会的・時代的に同化の方向性を意味づけられたインテグレーションの変わりに、本来的な意味における「統合」を表す語として使用できるだろう。

『21世紀を見据えた障害者スポーツの在り方』⁽⁹⁾において、障害者スポーツ在り方研究会は、「障害のある人とない人が一緒に行う(Integrated)スポーツ(車いすテニスのニューミックス、車いすダンス、盲人マラソンなど)や、障害のない人が車いすを利用してスポーツを行う場(reverse integration)もあることから、障害者スポーツもこうしたものをも含む大きな概念で捉える必要がある」(障害者スポーツ在り方研究会[1997:9])と言っている。しかし我々は、前述した考えから、インテグレイティッドスポーツとニューミックスを明確に区別する。我々の考えるニューミックスは、「障害者」と「健常者」という異なる位置づけをされたプレーヤーが、その各々の位置づけを生かしてプレーをする、新しいスポーツなのである。そして今ひとつのリバースインテグレイションは健常者スポーツを基盤としたスポーツではなく、ある障害者スポーツが存在し、それが逆に健常者スポーツに影響を及ぼしていくという方向性に沿って、更に障害者スポーツに今までと違った広がりをもたらす。盲人卓球はこのリバースインテグレイションの性質を備えているのである。盲人卓球はアイマスクによる障害の無意味化が為されており、「健常者スポーツを易しくしただけ」のものでは決してない。つまり盲人卓球においては、障害者・健常者に関わらず、全く同じルールのもとでプレーすることが出来るのである。

ところで、(1)のインテグレイティッドスポーツの考え方は前述した②「障害者用にルールを配慮したものにする」という発想に通じるものである。そしてまた、アダプテッド・スポーツ(adapted Sports)の考えと重なるものである。アダプテッド・スポーツとは、矢部によれば、「スポーツのルールや用具を障害の種類や程度に適合(adapt)させることによって、障害をもつ人は勿論のこと、幼児から高齢者、体力の低い人であってもスポーツに参加することが可能になる」(矢部[1997:2])という発想のもとに障害者スポーツの総称の1つとして提唱される。「競技に人間を合わせるのではなく、人間に合わせた競技を考え出すという発想で、障害の有無に関係なく、すべての人が参加できるスポーツ」(石塚[1997:398])というものだが、その目指すところは「社会的弱者に優しく」という領域に捕らわれているように思える。つまるところ「社会的弱者でも出来るように」ということなのである。社会的弱者が「ちょっとルールを変えてもらう」ことでしかスポーツに参加できないのなら、彼らは障害者スポーツの中でも「社会的弱者」としての性質を持ち続けねばならないことになる。そうではなく、障害者スポーツはもっと広い概念として提供できるのだ。障害者(あるいは社会的弱者)には、自分に合ったスポーツを選ぶ自由があり、勝敗や他者との比較・競争を超えたところでスポーツを楽しむ自由があるのである。それはアダプティッド・フィジカル・アクティビティ(adapted physical activity)の考えによって提唱される。アダプティッド・フィジカル・アクティビティとは「スポーツのル

ールや身体活動の方法を個人の身体的状況、あるいは知的な発達状況に応じて変容させる」(藤田[1999:286])もので、この意味ではアダプテッド・スポーツと変わらない。しかし「あくまで本人を尺度として、スポーツや身体活動に参加する他者との対峙は想定されず、価値も個人の中に想定される。スポーツする個人は、この意味で絶対的存在ということが出来る。近代スポーツの重要な構成要素である競争、勝敗、普遍的ルール、平等性は、アダプティッド・フィジカル・アクティビティにおいては、個人の絶対的存在の前にその地位を低下させざるをえない。」(藤田[1999:286])という、「絶対的存在としての個人」を前提とした障害者支援プログラムの可能性を示唆するものである。アダプテッド・スポーツが、競技性という近代スポーツの性格をまだ受け継いでいるのに対し、アダプティッド・フィジカル・アクティビティは、他者との競争や勝敗から離れてスポーツに取り組むという、新しい価値を提示する。その意味で、後者の方がより突き進んだ主張をしていると言えるだろう。

だが、それでも、アダプティッド・フィジカル・アクティビティのように、障害者スポーツにおいて完全に競技性への志向を捨て去ることは出来ないのである。障害者スポーツには2つの道が存在する。ひとつは、他者との競争、勝敗、比較ではなく、自分の中にある価値に従うという考え、もうひとつは、まさにその競争や勝敗の中でより高い競技性を追求していくという、近代スポーツの流れを汲む考えである。この2つは、それぞれに重要な価値の在り方なのだが、アダプティッド・フィジカル・アクティビティを主張すると、前者の価値しか認められないということになる。だが、我々はやはり、障害者スポーツには競技性への志向という道が存在すると考えるのである。個人に還元する価値とともに、スポーツに競争や勝利、他者との比較を求める価値も確かに存在するのだ。この問題を解決するにあたって、我々は今一度、障害の無意味化という概念に注目したい。なぜなら、障害が無意味化されたスポーツでは、まさに「無意味化」されたが故に、障害の程度(軽い・重い)や健常者との比較で苦痛を感じるものがなくなり、更にまた競技性を追求することも可能なのである。確かに、本当に重度の障害者を前にしたとき、無意味化が確実に機能するかという問題は残る。しかし、それでもなお障害の無意味化は、新たに「非障害者スポーツとしての障害者スポーツ」を創造する、きわめて意味のある提言なのである。

3. リズムスポーツと戦術

我々は、第1節において構成的ルールから盲人卓球を説明し、続く第2節で障害者スポーツという理論の枠組みから盲人卓球を検討してみた。そこで、この第3節では、我々が実際に参加し観察して得たデータに基づいて、盲人卓球を捉える。

盲人卓球は、平面でするスポーツである。つまり、浮くと負けである。だから、ホールディングやダブルヒットは反則になる。この節では、人々は盲人卓球を実際どのように楽しむかに焦点を当てる。なぜなら、スポーツにおいて人々を惹きつける、あるいは、人々に受け入れられる楽しさがなければ、スポーツとして成り立たないからである。スポーツの楽しさとは、たとえば競技性の高さが挙げられる。

盲人卓球の場合の楽しさとは、ルールには定められていない戦術に表れる。戦術とはす

なわち、選好ルールのことである。選好ルールとは、場面場面で当然とされる戦術をさす。いわゆる、セオリーである。プレーヤーに選好されるルールである。構成的ルールは守らないと試合とは呼べないが、それとは違って、選好ルールは守らなくとも試合は進む。

以下の戦術は、盲人卓球がリズムスポーツであるということと深く結びつく。リズムスポーツとは、次の2点を意味する。一点は、試合形式のスポーツで勝ち続ける／負け続ける、敵／自分のペースにのるといことがある。試合の流れをつかむとも言う。このリズムのことを指す。もう一点は、打ち合いの中で生じるリズムである。詳しく述べると、スピードの緩急を駆使し、サーバーからレシーバーへ、そしてサーバーへと返球するリズムである。

それでは、盲人卓球の戦術を以下に示す。リズムスポーツの分類にしたがって、戦術を2種類に分ける。まず、リズムスポーツの後者と結びつく戦術を示し、次にリズムスポーツの前者と結びつく戦術を示す。

1つ目の戦術は、コースを打ち抜かない⁽⁴⁾ということである。卓球との比較から、明らかにする。卓球では左右にコースを打ち分けて相手のバランスを崩していく。一方、盲人卓球では、コースを左右に打ち分けて相手のバランスを崩すのは、有効な戦術ではない。むしろ逆サイド（対角）のコースをねらうことは自滅することになる。もちろんプレーヤーはアイマスクをつけているためコースをねらうことは難しいということはある。しかし、盲人卓球になれた上手なプレーヤーであれば、コースをねらうことも可能である。なぜなら、盲人卓球は左右に動くスポーツではなく、反応に瞬時の移動が必要で時間をとられるわけではないからである。コースをねらうことが有効でない理由は、フレームの存在である。球はエンドフレームに当たった後コート内につかなければアウトになるというルールがあるため、ボールはフレームに対して垂直に当たらないとイン（セーフ）になりにくい。

大柴の指摘の要旨をしめす。「エンドフレームに垂直に球を当ててコートに返すことは、練習で重視して行う。欠点は相手に球筋を読まれやすいこと、長所はミスをしにくく、コートに出にくいことである。長所に重点が置かれ、この練習を採用した理由は、盲人卓球が相手のミスを誘って勝つスポーツだからである」（岡田・大柴・檜田[1998]）。

私たちが撮影したビデオには、アイマスクをつけたプレーヤー対アイマスクをつけない目の見えるプレーヤーの試合のシーンがあるが、目が見えるプレーヤーは、目が見えるあまりしばしばこのセオリーを無視し、コースをねらいアウトになっている。

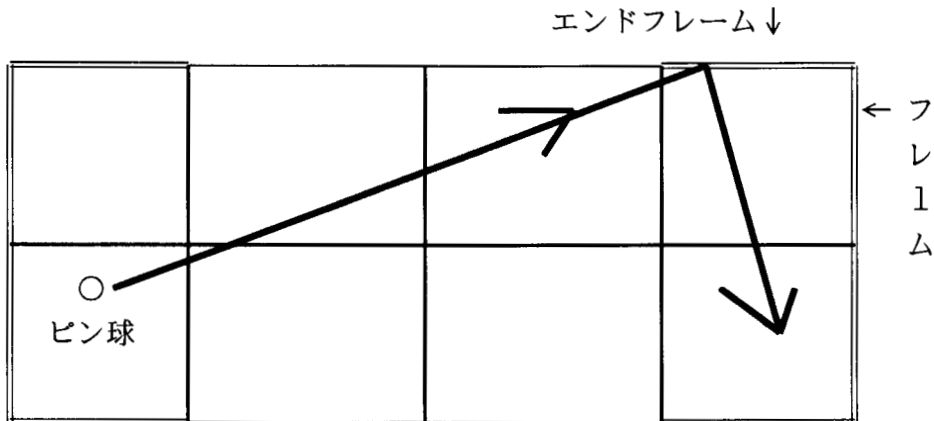
2つ目の戦術は、スピードに変化を付けることである。スピードに変化を付けることが有効であるという戦術は、卓球と同様に有効である。たとえば、3球ほど続けて強くうち、相手に強い球ばかり打つと誤推測させ、その隙を狙って、弱い球を打つ。しかし盲人卓球ではダブルヒット、ホールディングという反則があるため、きちんと一度で球を当てなければ反則をとられる。音だけを頼りに、レシーバーは球を打ち返す適切な場所を定める事は難しいため、この戦術がより有効になっている。

私たちが撮影したビデオにおいても、その証拠がある。アイマスクをつけたプレーヤー対アイマスクをつけない、目の見えるプレーヤーの試合では、後者は、前者とは違い、きちんとインパクトポイントを捉えている。また、前者はスピードの変化に弱いことが見て取れる。

3つ目の戦術は、サービスである。サービスで、コースをねらう。大柴の要旨を示す。

「サービスでサイドフレームの端に当て、右に寄ったレシーバーが左に変化する球についていけなくする」(岡田・大柴・樫田[1998])。コースを変えた球で、レシーバーに返球させなくする。

図4



4つ目の戦術は、「いきますーはい」による駆け引きである。「いきますーはい」のルールの説明をする。まず、サービスをする際、サーバーが静止したボールをラケットでうつ体制に構える。次に、サービス直前に「いきます」と声をかける。最後に、5秒以内にレシーバーが「はい」という。これは、基礎的条件と呼ぶことができる。なぜなら、視覚障害者にとって、この「いきますーはい」という声かけによって、相手の動向を知るからである。戦術として使用可能である。「いきます」から5秒以内になら、いつでも「はい」といいさえすればよいので、たとえば「いきます」から間をおいて返事をしてもいいし、直後に返事をしてもいいからである。それは、必ずしもレシーバーに有利な戦術とは言えない。わざと時間をおいて「いきます」と宣言したり、レシーバーがまだ始まらないだろうと高をくくっているような早いときにその虚をついて宣言することも可能だからである。また、レシーバーが「はい」と返事してから、サーバーがいつサーブをするのかも戦術である。このようにサーバーとレシーバー双方が戦術として使用可能である。また、池田の指摘を要旨で示すと、『サーバーが顔を一方の端によせて「いきます」といって、レシーバーに球のくる方向を誤って推測させておき、もう一方の端からサーバーがサービスをする』(岡田・近藤・池田・樫田[1998])という戦術がある。相手のリズムを崩すことが、戦術になる。

近藤の要旨を示すと、『「いきますーはい」の戦術は練習ではほとんど使わない』(岡田・近藤・池田・樫田[1998])。

以下の2つは、リズムスポーツの前者と結びつく戦術である。

1つは、ラケットに関することである。ラケットには卓球と明らかに違って、ラバーがないという点に注目する。ラケットにラバーがないのは、ピンポンの打球音をはっきりと出すためである。リズムスポーツとも結びつく。ラケットに関して、ルールには以下と定められる。

「1 ラケットは、材質・形状・大きさ・重量とも任意とする。ただし本体は木製で、かつ硬く平坦でなければならない。

- 2 バランスなどの関係から、指の当たる部分を加工することは差し支えないが、打球面の加工については認められない。
- 3 ラケットは、日本卓球ルールの細則（2，1，4）で規定する「JTAA」のマークと、業者名が連続して刻印されているのか、商標がなければならない。
- 4 ラリー中、ラケットは1名につき1本限り使用するものとする。

（注）ラケットが破損した場合を除き、選手が任意に他のラケットを使用しようとする場合、審判員はその練習を認める必要はない。」

（全日本スルーネットピンポン協会（編）[不明:3]）

この規則を守りさえすればいい。後は、個人の手の大きさや好み、上達振りに合わせてよい。たとえば、ラケットの形には丸いものや四角いものがあるが、球を当てるだけなら、四角いものの方があたる確率は高くなる。

もう1つは、作戦タイムである。実際に、試合で導入されていない。大柴の指摘の要旨を示すと、「作戦タイムをとれば、プレーヤーの緊張や寂しさをほぐしたり、理性を取り戻す働きがあるばかりでなく、負け続けている試合を止める働きがある。アイマスクをつけていて見えないということは、目で得る情報が全くないということである。その状況で、プレーヤーが台との向きが平行でないのに気づかないのが原因で、連続して失点するときや、敵の癖をプレーヤーに助言すると、非常に有利になる。導入に当たって注意すべきなのは、プレーヤーに作戦タイム中といえどもアイマスクをはずさせないことである。なぜなら、スポーツは公平性を建前とするのに、アイマスクをはずして見ることができたなら、不公平になるからである」（岡田・近藤・池田・樫田[1998]）（岡田・大柴・樫田[1998]）。作戦タイムの導入で、2点の効用がある。一点は、より一層、試合を競技性の高い面白いものにすることができるということである。もう一点は、作戦タイムが盲人卓球だからこそ必要になる理由であるのだが、プレーヤーに視覚的認知をあたえるということである。

このように、盲人卓球は独自の戦術がある。だから、スポーツとしての楽しさを備えており、人々を惹きつけ、スポーツとして成立する。

4. おわりに

この研究で提示したことは、以下の三点である。

一つ目は、盲人卓球が、卓球とは異なり、盲人卓球として成立するという点を、固有の構成的ルールを持っているという点から明らかにした。

二つ目は、盲人卓球が、「非障害者スポーツとしての障害者スポーツ」という新しいスポーツの形を持つということである。つまり、「インテグレーション」という「健常者」と「障害者」の枠組みに結びついた、健常者への同化という意味にもなる概念とは一線を画した障害者スポーツのとらえ方を提示した、ということである。

三つ目は、盲人卓球が固有の戦術を持つことである。固有の戦術は人々を惹き付けるスポーツの楽しさに結びつくものであり、だからこそ盲人卓球はスポーツとしての発展性があるといえる。またスポーツとしての発展性があるからこそ、二つ目に示した「非障害者

スポーツとしての障害者スポーツ」の価値がある。

最後に、この研究に御協力を頂いた関係者に深く感謝する。特に、快く参与観察に応じてくれた徳島市盲人卓球クラブのみなさん、徳島市保健福祉部福祉事務所の田村茂美さん、貴重な助言を頂いた大柴豊先生（徳島県立盲学校）と、岡田光弘氏（筑波大学大学院）に深甚の感謝を申し上げる。

- (1) テーブルの上でボールがはねている擬音に基づく商標
- (2) この議論については以下の論文を参照した。
藤田[1998]、障害者スポーツ在り方研究会[1997]。
- (3) 障害者スポーツ在り方研究会が、財団法人日本身体障害者協会の委託を受けて、その報告をまとめたものである。
- (4) コースをねらうこともある。それは、手元をねらうことである。

<参考文献>

- 藤田 紀昭 1999 「スポーツと福祉社会 — スポーツをめぐる — 」 井上 俊・亀山 佳明（編） 1999 『スポーツ文化を学ぶ人のために』 世界思想社。
- 藤田 紀昭 1998 『ディサビリティ・スポーツ — ぼくたちの挑戦 — 』 東林出版社。
- Garfinkel, Harold 1963 “A Conception of, and Experiments with, “Trust” as a Condition of Stable Concerted Actions” ,Harvey, O.,J., (ed) *Motivation and Social Interaction* , New York Ronald Press :187-238.
- 石川 准 1999 「障害、テクノロジー、アイデンティティ」 石川 准・長瀬 修（編）『障害学への招待』, 明石書店：41 - 77。
- 石塚 和恵 1998 「身体障害者スポーツに理学療法士としてどうかかわるか」『理学療法ジャーナル』 32 - 6（特集身体障害者スポーツ）:393-398 医学書院。
- 檜田 美雄 1993 「協同的達成としてのパッシング — エスノメソドロジ的秩序理解の試み — 」 江原由美子（代表） 『微視的権力状況における会話分析』平成2~4年度 科学研究費補助金研究成果報告書：55 - 65。
- 倉本 智 1999 「異形のパラドックス——青い芝・ドッグレッグス・劇団態変——」 石川 准・長瀬 修（編） 『障害学への招待』 明石書店：219 - 255。
- 黒須 充・高橋 豪仁・藤田 紀昭 1996 『第31回全国身体障害者スポーツ大会調査報告書』。
- 木村 晴美・市田 泰弘 1996 「ろう文化宣言——言語的少数者としてのろう者——」 『現代思想臨時増刊号』 青土社：8 - 22。
- 長瀬 修 1999 「障害学に向けて」 石川 准・長瀬 修（編） 『障害学への招待』 明石書店：11 - 39。

- 岡田 光弘・近藤 美智子・池田 梅一 1998 『障害者スポーツと社会 — 盲人卓球の過去・現在 — 』
- 佐藤 充宏 1997 『僕らにスポーツ・僕らもスポーツ』 ベースマガジン社。
- 障害者スポーツ在り方研究会（財団法人日本身体障害者スポーツ協会） 1997 『21世紀を見据えた障害者スポーツの在り方』。
- 上田 敏・大川 弥生（編） 1996 『リハビリテーション医学大辞典』 医歯薬出版株式会社。
- 矢部 京之助 1997 「アダプテッド・スポーツと障害を持つ人の体力特性」『東海保健体育科学』19 :1 - 11 東海体育学会。
- 財団法人 日本身体障害者スポーツ協会 1996 『全国身体障害者スポーツ大会競技規則の解説』 財団法人 日本身体障害者スポーツ協会：34 - 42。
- 全日本スルーネットピンポン協会（編） 出版年不明 『スルーネットピンポン競技規則』 出版社不明 複写物（1999年8月2日徳島市福祉事務所盲人卓球世話人より入手。徳島大学の樫田 美雄研究室にて所蔵）。

第2章 車椅子バスケットボールとはどのようなスポーツか?

車椅子バスケットボール班

[目次]

0. はじめに
1. 車椅子バスケットボールとは?
2. 調査概要
3. 考察
 - 3-1 コミュニケーション
 - 3-2 シュート&ブロック
 - 3-3 パス
 - 3-4 回転
 - 3-5 フェイント
4. 結論

0. はじめに

私たちは車椅子バスケットボールに興味を持ち、障害者スポーツの一つとして研究をするにつれて、一般バスケットボールと同じコートや同じ高さのリングで行われていることをどう理解するのか、疑問を持つようになった。これに答えるべく、次の2点について注目する。①車椅子をどのように捉えるべきであるのか。②どのような点が車椅子バスケットボールらしいのか。これらの問題を研究することによって、車椅子バスケットボールの発展を目指したい。

1. 車椅子バスケットボールとは?

- ・車椅子バスケットボールは、普通のバスケットボールと同じコート・ボール、同じ高さのリングを使用する。どの程度の障害の人でも参加できるように、障害の重さでひとりひとりに持ち点⁽¹⁾が与えられる。(障害の軽い人ほど持ち点が高くなり、障害の重い人ほど低くなる。)この持ち点によってクラス分けがなされる。チーム間の格差をなくすために、1チームの合計持ち点が14点以下と定められている。
- ・車椅子は規定内であれば、自分の体に合ったものを使用できる。(文末資料の図10参照)
- ・ボールを持っているときは2回までのプッシュ⁽²⁾が認められている。
- ・車椅子バスケットボールにはダブルドリブルの反則は適用されない。

ダブルドリブルを適用しない理由として、井手編(1998)は次のように挙げている。

車椅子を操作しながらボールをプレイすることは大きな制約であり、この規定はプレイの展開をより広くするためのものである。(井手編 [1998: 49]『全国身体障害者スポーツ大会規則の解説』)

2. 調査概要

観察対象 T県車椅子バスケットボールクラブ
 練習 週2回 木・日曜日
 場所 T県勤労身体障害者体育施設
 観察日 1999年7月8日(木) 18:00~21:00
 1999年8月29日(日) 13:00~
 1999年11月28日(日) 第29回内閣総理大臣杯争奪 日本車イスバスケットボール選手権大会 某地区予選大会

図1 T県車椅子バスケットボールクラブ
 (◎=キャプテン)

背番号	氏名(仮名)	性別	持ち点
4	早崎	男	1.0
◎6	森	男	4.0
7	西村	男	1.0
10	三田	男	2.0
11	松島	男	3.5
12	岡本	男	2.0
13	上田	男 </td <td>1.0</td>	1.0
14	成瀬	男	3.0
16	藤川	男	1.0

調査方法 私たちはT県勤労身体障害者体育施設で車椅子バスケットボールが行われていることを知り、調査することにした。まず練習の観察をしてメモを取り、3回ビデオ撮影をした。そのうち1回は選手権大会の試合を撮影したもので、この試合のビデオを中心に分析した。

3. 考察

フリースローレーンでは、ディフェンスとオフェンスが密集しやすく、センターサークル付近ではあまり密集しない。観察していくと、その2つの場所で行われる動きは違っており、2つのゾーンに分けることによって、より深い研究が出来ると考えた。

図2 AゾーンとBゾーンの定義

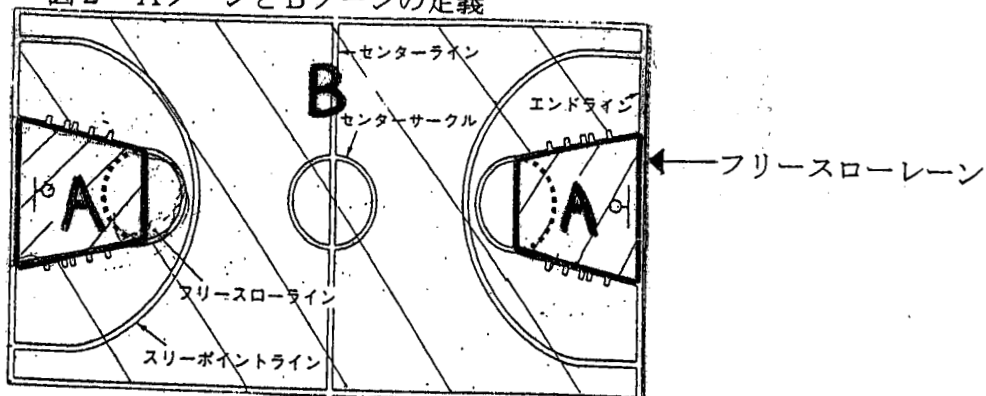
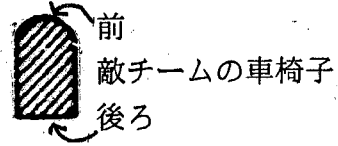
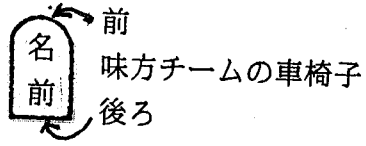


図3 トランスクリプト1説明図

(コート前半面のみかいている。)

点線は視線の方向を示す。

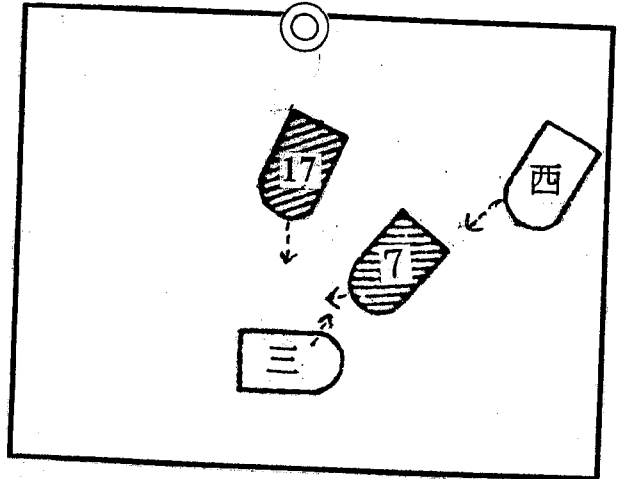
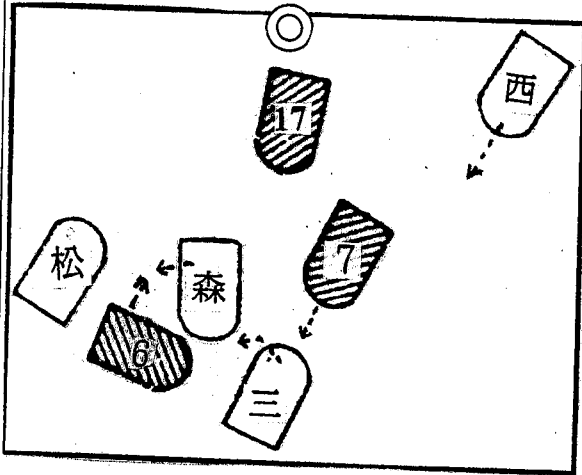
記号説明



◎ = リング (Ring)

11:44:45

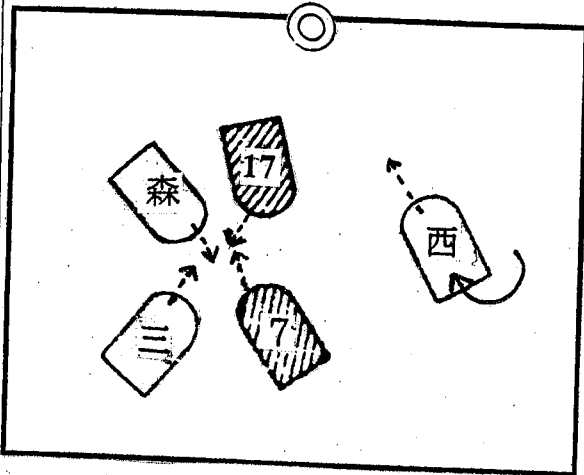
11:44:46



1. 三田がボールを持っている

2. 西村が三田に近づいてくる

11:44:48



3. 「上に上がるな！」と三田は指示を出す。
西村はすぐにターンする。

3-2 シュート&ブロック

図4 ゾーン別にみるシュート

ゾーン		片手	両手	計
A	入る	9本 (41%)	6本 (43%)	15本
	入らない	13本 (59%)	8本 (57%)	21本
	計	22本 (100%)	14本 (100%)	36本
B	入る	0本 (0%)	2本 (17%)	2本
	入らない	10本 (100%)	10本 (83%)	20本
	計	10本 (100%)	12本 (100%)	22本

シュートには両手でシュートする時と片手でシュートする時がある。私達はAゾーン、Bゾーンにおいてのシュートの成功率に差があることに気付いた。Bゾーンよりリングに近いAゾーンからのシュートの成功率は高い。また、車椅子に乗っているとジャンプが出来ないため、リング下でのブロックは手を伸ばすだけになり、打たれたシュートをはたきおとすことは難しい。(さらにいえば、リングから遠いBゾーンからのシュートは入りにくいという可能性もある。)従って、車椅子バスケットボールは一般バスケットボールよりも、Aゾーンに入れさせない戦略⁽³⁾の重要性が大きくなる。また、Aゾーンに入れさせないブロックの時に大きく影響するのが、車椅子の幅である。車椅子が密集するところでは、オープンスペースが小さくなるため、守る側は守りやすい。しかし、攻める側にとっては、車椅子は体のように縮めることができないため切り込みにくい。つまり車椅子が密集しやすいAゾーンでは、密集しにくいBゾーンに比べて車椅子の幅の影響がより大きくなる。

同じコートを使うということは「一般バスケットボールと同じところ」であると単に考えてしまう。ところが詳細にみていくと、そのゲームの中における意味合いは違っていた。どうして意味合いの違いが生まれるのか。それは、同じコートを使うからである。

一般バスケットボールの場合、ドリブルをする時はボールをとられないよう、空いている手で敵が近づいてくるのを防ぐ。ところが、車椅子バスケットボールでは、ドリブルをしていない手で、車椅子を漕ぐのでこの戦術⁽⁴⁾は使えない。つまり、車椅子バスケットボールでは、敵が近づいてくるのを防ぐ手立てがないようにすら見える。しかし、車椅子バスケットボールの場合は、敵の反対側でドリブルをしてさえいれば、ボールを敵にとられる心配はなく、手で防ぐ必要がない。つまり“できない”のではなく、“しない”とも言える。このように考えると敵が近づくのを手でとめないということは、車椅子バスケットボールのみによる特徴とは言い難い。「防ぐ必要がなければしない」というこのことは、バスケットボールのプレーの中に埋め込まれている大きな戦略にも基づいているからである。

3-3 パス

パスにはボールをバウンドさせて味方に渡すバウンドパスと、バウンドなしのスローパスがある。この二つのパスをAゾーン、Bゾーンという場所にも注目して集計した。

図5 ゾーン別に見るパス集計

	バウンドパス	スローパス
Aゾーン	4回	64回
Bゾーン	119回	100回

車椅子バスケットボールでも一般のバスケットボールでも、Aゾーンはプレイヤーが密集する。これはタイミングさえ合えば、パスボールをカットしやすい位置にたくさんのプレイヤーがいるということでもある。図6のように、スローパスは①のゾーンを通り、バウンドパスは②のゾーンを通る。スローパスは敵が手を伸ばせばカットされる可能性がある。しかし、バウンドパスは手を伸ばしただけでは届かない位置を通り、カットされにくい。バウンドパス、スローパスなどの様々なパスを使えば、敵はパスの出る方向が予測できないため、守備する範囲が広がり注意が散漫となる。それによってパスが通りやすくなる。

しかし図5から分かるように我々のデータにおいては、リング下など比較的車椅子の密度が高くなるAゾーンではBゾーンに比べてスローパスが多い。これは、バウンドパスにはバウンドする余地が必要であり、Aゾーンではその余地がないということだ。なぜバウンドする余地がないのか。それには、彼らが車椅子に乗っていることが大きく関係する。車椅子は場所を取るし、股下をくぐらすようなバウンドパスもありえない。密集しないBゾーンでのバウンドパスとスローパスの頻度にほとんど差はない。にもかかわらず、密集するAゾーンでは大きな差が生まれる。つまり、空間に対する車椅子の幅が、より有意味になる。このことは、まるで車椅子バスケットボールのみで起こることのように思え、このことこそが車椅子バスケットボールの特徴であると考えてしまう。しかし、パスを出すスペースがなければ出さないとか、敵にとられる危険があるならパスを出さないといったことは、ゲームをする上でプレーの中に埋め込まれた、バスケットボールの大きな戦略のうちである。

図6 Aゾーンにおけるパスの通過位置

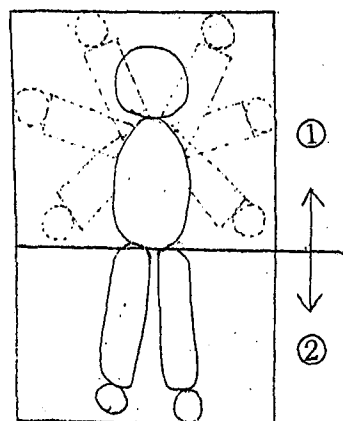
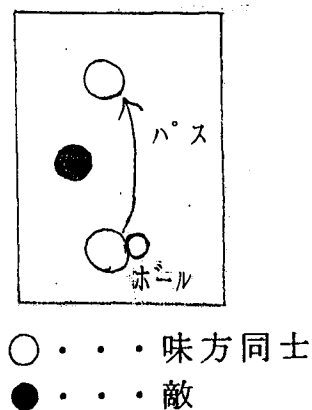


図7 敵と味方の配置図



3-4 回転

回転というテクニックを利用している場面がある。ボールを持っていた森さんはパスを出したかったが、前方に敵が二人いたため2回転した後パスを出した。この2回転をすることは戦略と呼べるのではないか。回転している間、敵は手を出しにくいし、味方もパスをもらうべき場所に移動することができるからだ。

この2回転と似ている技が一般バスケットボールでもある。ピボットターンである。ピボットターンとは片足を軸にして、もう片方の足を動かし体ごと回転するターンである。2回転とピボットターンは、どちらも敵にボールを取られないようにしながら、味方にパスをするチャンスを窺うという点では同じである。しかし、一般バスケットボールは、「体一体」なのでより近くまで近づかれ、ボールをはたき落とされたり、ヘルドボールになったりしやすい。一方、「車椅子-車椅子」では、手を伸ばしただけでは敵のボールまで届かないし、かといって回っている車椅子に近づいてぶつくとファールになってしまう。だから敵は近づきにくい。同じ目的のためにしているが、一般バスケットボールよりもボールを守りやすいと言える。だから、試合時の重要さを考えたときに、車椅子バスケットボールにおける2回転のもつ意味合いは、一般バスケットボールにおけるピボットターンよりも大きく重要になってくる。これは道具としての車椅子を上手く使った戦術と言える。

3-5 フェイント

以上で見てきたように、一般バスケットボールに比べて車椅子の幅の影響が大きいAゾーンには、車椅子が入りにくい。したがって、いかにAゾーンに入るかが、一般バスケットボールより重要となる。そこでAゾーンにいる敵のブロックをくずすために、フェイントをする方法がある。次に取り上げるのが、フェイントを用いる場面の事例である。

トランスクリプト2 (11:44:51~11:44:55)

[三田]	全全全全全全全全全全, . 松, . 右右右右右	[分析不可能]
	右サイドへ移動	①パス
[青6]	三三三三三三三三三三, . BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB	
	その場ターン 向きを松島へ リング下へ もう半コートの方へ移動	
[森]	171717, . 三三三三三三, . BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB	
	体の向きを松島へ リング下へ もう半コートの方へ移動	
[青17]	森森森森, . 三三三三三三, . BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBB	
	体の向きを松島へ リング下へ	
[青14]	??? [分析不可能] ?松松松松松松松松松松松松松松, . BBBBBBBB	
	松島を追いかける	
[松島]	? [分析不可能] 三三, . B, . 全全, . RRRRRR, . BBBBBBBB	
	キャッチ リング下へ移動 シュート	

①の時点で、三田さんは松島さんを一度ちらりと見たあとすぐに視線をはずし、わざと反対の方向（右）を見ながら松島さんにパスを出す。三田さんにぴったりと付いていた青6は、三田さんの視線を追いかけてその方向を見る。パスを出したい相手である松島さんの方を見ると、青6にパスカットされるかもしれない状況にあったが、反対方向を見るというフェイントによって、松島さんへのパスが成功している。そして松島さんは敵に悟られずにノーマークでパスをもらうことができ、リング下まで移動してシュートをした。このフェイントの方法は一般バスケットボールでも見られるやり方である。一般バスケットボールと同じ技術（フェイント）を用いているが、Aゾーンに入りにくい車椅子バスケットボールにおいては、戦術としてのフェイントの重要性が強くなる。

図8 トランスクリプト2説明図

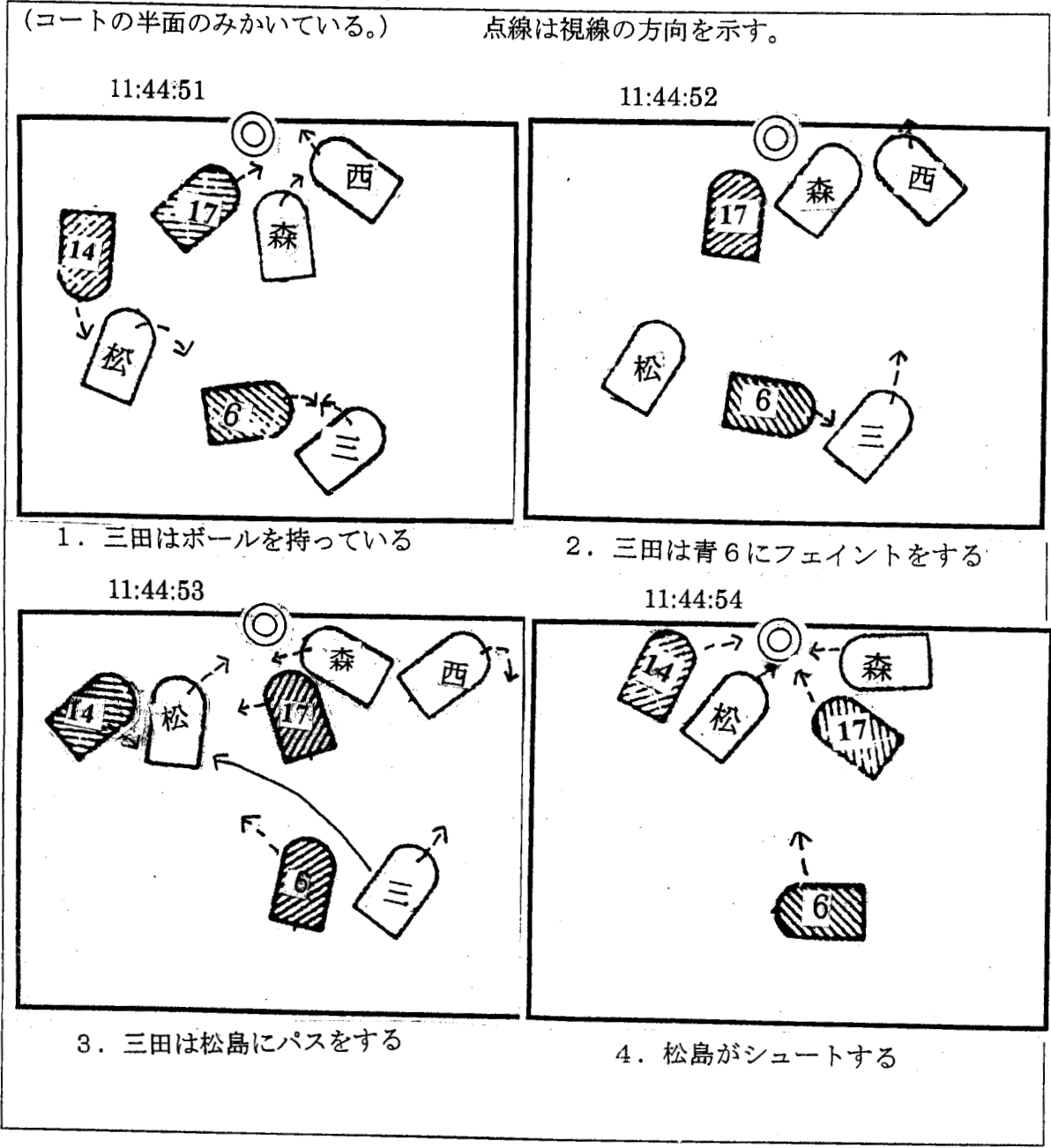


図9 本論文の理論枠組

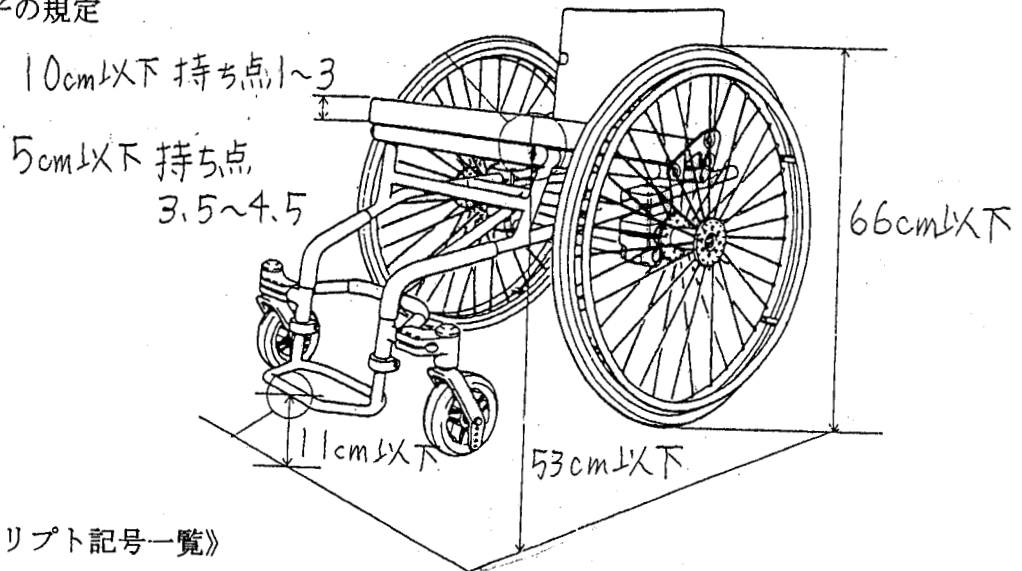
戦術	バスケットにおける大きな戦略
・一般バスケットと同じ	<ul style="list-style-type: none"> ・一般バスケットと同じ →3-1 ・一般バスケットと違う →3-2、3-5 (車椅子バスケットらしい)
・一般バスケットと違う (車椅子バスケットらしい)	<ul style="list-style-type: none"> ・一般バスケットと同じ →3-3、3-4 ・一般バスケットと違う →3-1 (車椅子バスケットらしい)

4. 結論

3節の考察で述べたように、コミュニケーションに関しては、一般バスケットボールと何ら変わりがない。しかし彼らが車椅子に乗っていることを考えると、同じ高さのリングやコートを使用することの意味合いは、一般バスケットボールと全く同じとは言えない。なぜなら物理的の面積や物理的高さが同じコートやリングを使用しているも、ゲームにおける意味が違ってくるからである。またフェイントにおいても、同じことが言える。一般バスケットボールと同じ戦術だが、Aゾーンに入りにくい車椅子バスケットボールにおいては、フェイントの重要性が強くなる。ドリブルやパスに関しては、一般バスケットボールとは異なる戦術を用いている。しかし、バスケットボールにおける、より大きな戦略そのものは同じである。この一般バスケットボールと同じところが、むしろ車椅子バスケットボールの特徴にもなっている。

このように、戦術を細かく見ていくと、「一般バスケットボールと同じところ」と「車椅子バスケットボールらしいところ」の二側面があった。しかし、この「車椅子バスケットボールらしいところ」とは、実はバスケットボールに共通な、ゲームを有利に進める上での大きな戦略や基本原則によるところもあった。そして、「一般バスケットボールと同じところ」でも、その重要性や意味合いについて考えると一般バスケットボールとは違っていたところがあった。つまり、「車椅子バスケットボールらしい戦術」が一般バスケットボールによって作りあげられ、「一般バスケットボールと同じ戦術」が、かえって車椅子バスケットボールでは大きな意味合いを持つことにもなっている。

図10 車椅子の規定



《トランスクリプト記号一覧》

【記号】

参与者・事物に関する記号

[三] …三田さん

[森] …森さん

[松] …松島さん

[番号] …その背番号の人を見ている

[B] …ボールを見ている

[R] …リングを見ている

[前] …前を見ている

[右] …右を見ている

[全] …コート全体を見ている

[?] …どこを見ているか不明

【規則】

- ・ひとつのかたまりごとに _____ で区切る。
- ・視線の下に動作を書く。
- ・視線の記号の下に _____ を引いてあるのは、ボールを保持しているとき

《文献リスト》

藤原 進一郎他 1998 『身体障害者スポーツ指導の手引』 ぎょうせい。

井手 精一郎 (編) 1998 『全国身体障害者スポーツ大会競技規則の解説』 財団法人
日本身体障害者スポーツ協会。

(1) 全ての登録選手の持ち点は、それぞれの障害に見合った1から4までの点が審査によって決定し、万が一、疑義が生じた場合、再審査されることがある。また中間的な機能を有しどちらも決定し難い場合には、1.5点、2.5点、3.5点、4.5点といったハーフポイントの持ち点が付けられる。

(2) プッシュとは片手あるいは両手で、車椅子を移動させるために車輪を漕ぐこと。

(3) 戦略とは、ゲームの上での策略のことである。

(4) 戦術とは、パスやドリブル、シュートなどバスケットボールの技術を指す。

第3章 ろう者バレーボールにおけるカスケーディングとソーシャル・リフレクション — 「相互反映性」と「文脈依存性」 —

ろう者バレーボール班

0. はじめに

フィンランドのろうコミュニティについての研究を行ったマッキープニー (McIlvenny) は、彼らの相互行為を分析した。彼はこの研究の中で「カスケーディング (cascading)」と「ソーシャル・リフレクション (social reflection)」という現象を見いだした。

さて、私たちらう者バレーボール班は、ろう者バレーボールチームの練習を観察し、そこで行われる相互行為について分析を行った。私たちがこの研究の中で検討することは、彼らの相互行為においてどのように「相互反映性 (reflexivity)」と「文脈依存性 (indexicality)」が表れているかである。

まず、この節においては私たちが検討するこの二つのキーワードに関して解説する。それにより、私たちが、エスノメソドロジーの立場に立って分析するということを明確にしておきたい。以下より浜の論文 (1992「現象学的社会学からエスノメソドロジーへ」) に主として依拠しながら「相互反映性」と「文脈依存性」について簡単に解説する。

「文脈依存性」と「相互反映性」は、ガーフィンケル (H. Garfinkel) が、日常的な相互行為場面における、知覚作用の特質に名付けたものである。これは、シュッツ (A. Schutz) の対象の理論がもとになっている。シュッツの理論においては、知覚された対象は、それが物であれ行為であれ現実の対象とは区別されない。知覚されない対象はもはや対象と言うには不適切なものである。さらにガーフィンケルはここから、様々な仕方で知覚されるべき対象 (現実) というものは存在しない、と述べている。

ガーフィンケルはこの理論をもとに、相互行為における秩序の問題を「他者の知覚」の組織化という問題に翻訳した。そして「他者の知覚」を説明するために「物象化」と呼ばれる理論図式を展開する。「物象化」は二つの働きからなっている。第一に、感覚に与えられたシグナル (例えば、物体であればその形) がデータ、あるいは「経験の可能性」に理念化される。つぎに、多くのデータの中から、「物象化原理」に従ってあるものが選出され、それらが互いに関連づけられることによって、意味の統一体、すなわち「対象」が構成される。

「相互反映性」と「文脈依存性」とはこの物象化 (知覚のメカニズム) に関してそれぞれ異なる要素を指し示すものである。「相互反映性」とは、データと物象化原理が相互に参照し合うことによって知覚が形づくられ、それ以外に知覚の根拠が存在しないことを指している。そして「文脈依存性」はある対象が、状況によって異なる対象として知覚されることを指しているのである。

1. 調査概要

この研究は、エスノメソロジーにおけるビデオ分析の手法を用いて、ろう者がバレーボールの練習という相互行為場面で、どのように相互行為を行っているかを明らかにしようとするものである。

調査の対象は、T市内の聾学校の体育館で毎週月曜、金曜の夕方から練習を行っているろう者のバレーボールのチームである。調査は平成11年6月25日・7月9日・12日・16日・8月9日・27日の合計6回行われた。平成11年7月16日、8月27日の調査では体育館で四台のカメラを用いて練習をビデオ撮影した。7月16日分は練習だけを、8月27日分は練習と試合形式での練習試合を撮影した。ビデオ撮影のうち、8月27日分を分析に使用した。(ビデオカメラの配置は図1に示す。)

撮影に関しては、事前にバレーチームのコーチとメンバーに調査依頼状を出し、調査の許可を得た上で行っている。上記のように撮影されたビデオのデータの中から分析可能な場所を選び、必要に応じて動作などを記載した画像トランスクリプトを作成した。この論文の分析は、こうして作成されたトランスクリプトに基づいている。なお、論文中で用いた図は8月27日分のビデオデータをもとに作成している。

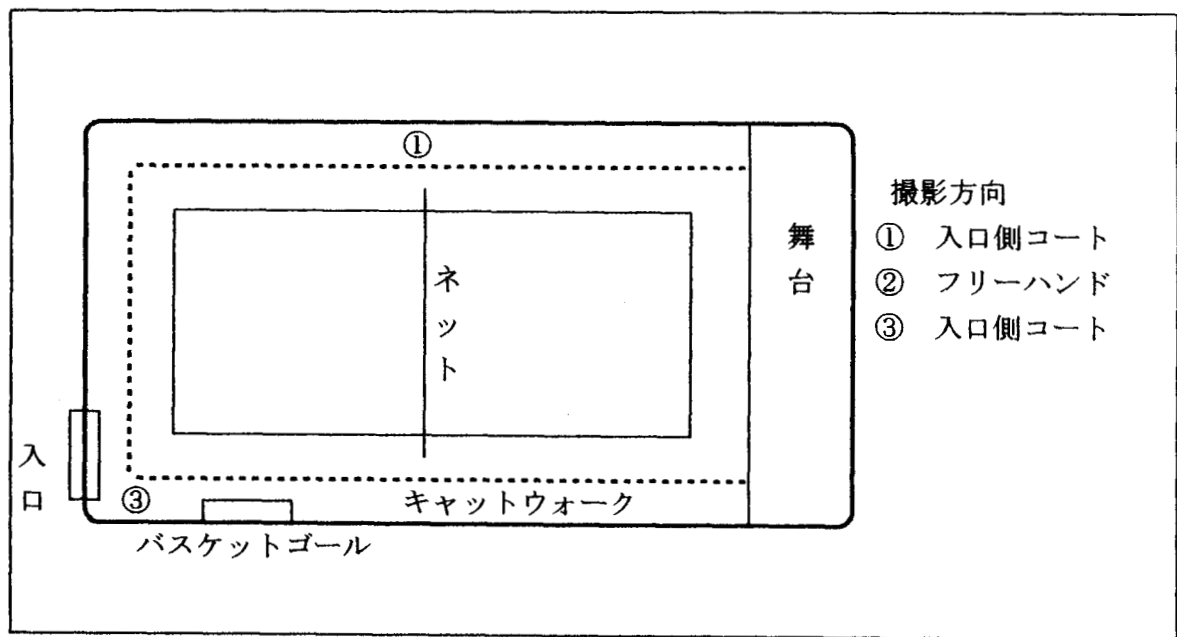


図1 ビデオカメラ配置図 (1999年8月27日)

2. ソーシャル・リフレクションとカスケードイングについて

2-1 ソーシャル・リフレクションについて

マッキープニーによれば、ソーシャル・リフレクションとは、「直接見ることのできない関連した行動を、そのときに見ることのできる他者の行為をモニターすることで見るということ」(McIlvenny[1995:133])である。それは、彼によれば、「局域的アクセスと他者排除的相互拘束を補償する現象」(McIlvenny[1995:133])である。

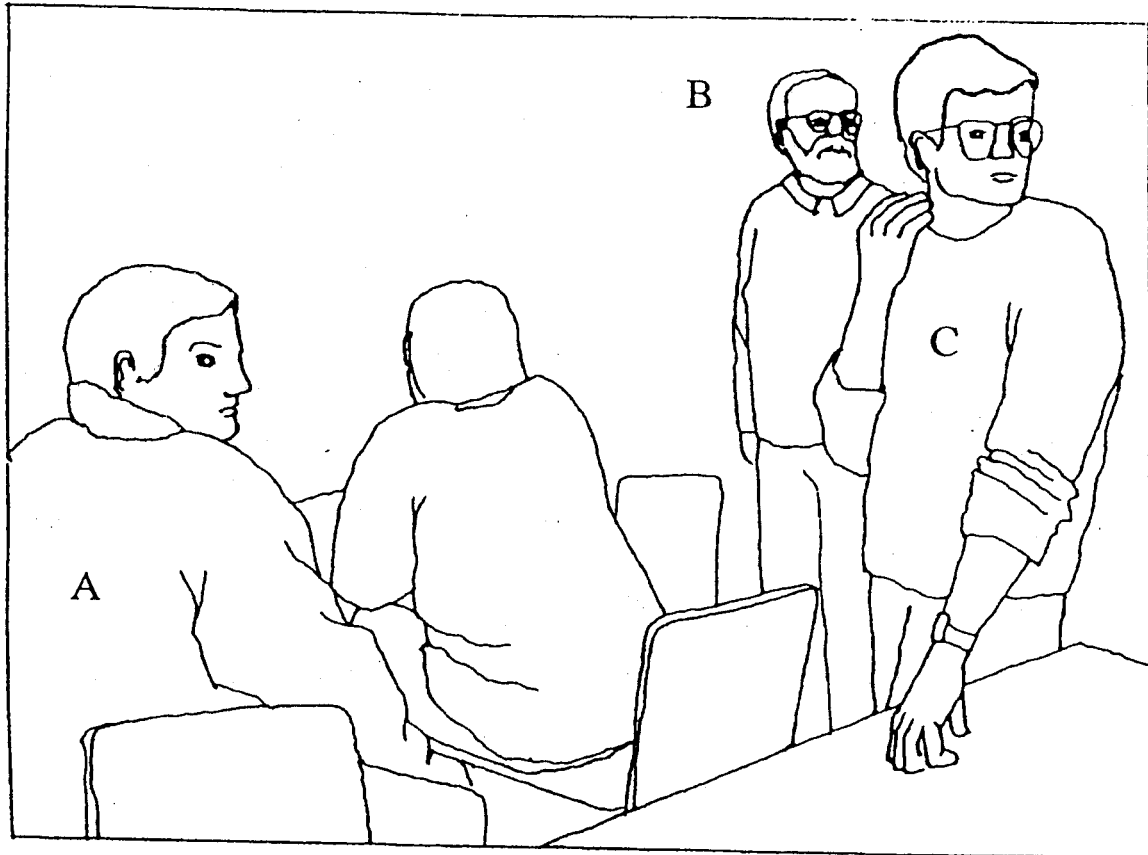


図2 ソーシャル・リフレクションの図 (McIlvenny[1995:133])

マッキープニーの議論 (McIlvenny[1995:132 - 133])によれば、人間は通常、自分の視界の範囲 (前方およそ170度程度) しか見ることができない。そのため、視覚を用いる相互行為の場合、繰り返し物を見たり、何かを見ようと、首が振れてしまう原因となる。「これらのふるまいは、特定の範囲で相互に排他性を生じてしまうという束縛を避けられない。それはもし、誰かが一方の視界に焦点を当てた場合、必然的にもう一方の視界は除外されてしまうということである。なぜなら、人間は両方を同時に見ることはできないからである」(McIlvenny[1995:132 - 133])つまり、視覚を用いた相互行為の場合、どうしてもアクセスは局域的にならざるをえない。それはお互いにお互いを見合う、他者排除的かつ相互的な拘束であるということ、である。

図1は、ホールにいた三人のうち、Bがまず振り返り、そしてCが振り返り、Cを見た

Aが振り返ったところである。「ろうコミュニティにおいて、光が点滅することは、全員が同時に知覚できることであり、グループの注意を引きつけるための共通のシグナルである。おそらくこのような慣例のために、Bがまず振り返ってホール後方に目を向ける。それからCが振り返り、AはたまたまCを見た後にそれに従う」(McIlvenny[1995:133])そして、そのようにCやAは、Bの行動を見て行動した結果、「この際、三人がこのようにして、自分たちに関係しているかもしれない行為に注目している」(McIlvenny[1995:133])ということである。これこそが、マッキーブニーの言う「直接見ることができない関連した行動を、そのときに見ることのできる他者の行為をモニターすることで見るということ」(McIlvenny[1995:133])である。

では、今起きつつある行動を、「直接見ることができない」にもかかわらず、なぜ自分に「関連した行動」であると言えるのだろうか。

それは、例えば、その場が自分に関係のあることが起きるのであろう場であるという、文脈に依存した注目、つまり文脈依存性に基づくと考えられるだろう。そして、何かしら起きたことが自分に関係あるかどうかを吟味した結果、そのような現象が現れるのだ、と言うこともできるだろう。しかし、そのような吟味が不断に行われているということは不自然である。むしろそれよりは、お互いがお互いに相手が自然言語の習熟の中にいると期待すること、という、期待の循環としてとらえるべきではないだろうか。

正面の人の行為が、社会から乖離した、突発的な筋肉の運動や発声ではなく、何かしら意味づけられたものであるであろうと信じているからこそ、そしてその人にはわたしに見えていないものが見えているであろうという期待があるからこそ、「直接見ることのできない」行動を「関連した行動」と考えることができるのである。加えて言うならば、「考える」という能動性すら不正確ではなかろうか。行為を自然言語の中に位置づけし意味づけすることで行為は解釈可能で反応可能なものになり、その現れとしてソーシャル・リフレクションは考えるべきであろう。

2-2 カスケーディングについて

マッキーブニーによれば、カスケーディングとは「理解を達成した集団から、理解を達成していない集団への、情報の移行においてなされる伝播、または連鎖反応(chain - react)などの諸活動」(McIlvenny[1995:133])であり、ソーシャル・リフレクションと並んで、局域的アクセス(local access)と他者排他的拘束(mutual exclusivity constraints)を補償する現象である。

次の頁の図(図3)は、デフリーダー(DL)が、解散しかけたメンバーに、言い忘れたことを伝えようとしている場面である。

リーダーは、注意散漫になった左側の集団に、手を振って注意を促す。すると、グループの他のメンバーが、同様に手を振って、同じようにその集団に注意を促す。注意を向かせる、という行動の伝播が、部屋の後方まで伝わる。そのとき、違うことに従事しているメンバー(図中のA)は、デフリーダーへのアクセスが制限されている。しかし、彼らがたまたま周囲に注意が働いたときに、デフリーダーに注目する周囲の人々が目に入る。そ

のことによって、アクセスが制限されていた人も、再びデフリーダーに注目するようになる。

つまり、カスケードイングとは、ある一点からあたかも滝 (cascade) の流れのように全体に伝播していく様子のことである。

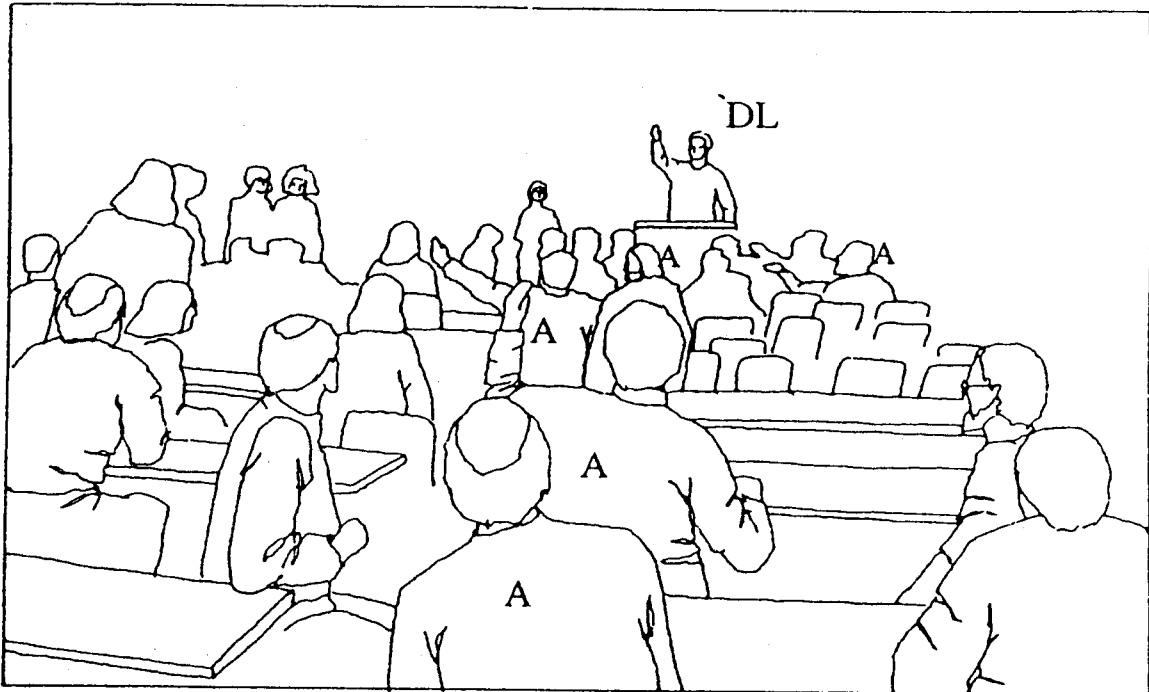


図3 カスケードイングの例 (McIlvenny[1995:134])

視覚を用いる相互行為の中では、前述のように局域的アクセスと他者排除的拘束が観察可能であるが、その中での期待の構造としては、お互いに排除し合っていることが前提としてあるのだから、つまりは「分かち合う」ということ、自分が知ったことは伝えていくこと、そして相手もそうしてくれているであろうことである。つまり、カスケードイングとソーシャル・リフレクションは、お互いに相補的な関係にあると言える。

3. 観察でのカスケードイングとソーシャルリフレクションについて

観察の場面は、レシーブ練習に移行するときに撮影の都合で、使用するコートの変更をコーチに依頼してコーチが準備中の他のメンバーにコートの変更を指示し、実際にメンバーが移動を開始している場面である。この場面ではカスケードイングとリフレクションが行われている。

8:48:03 (図4) のコーチの指示が基点となり、8:48:17までにカスケードイングが行われ、全ての参加者に指示が伝わっている。

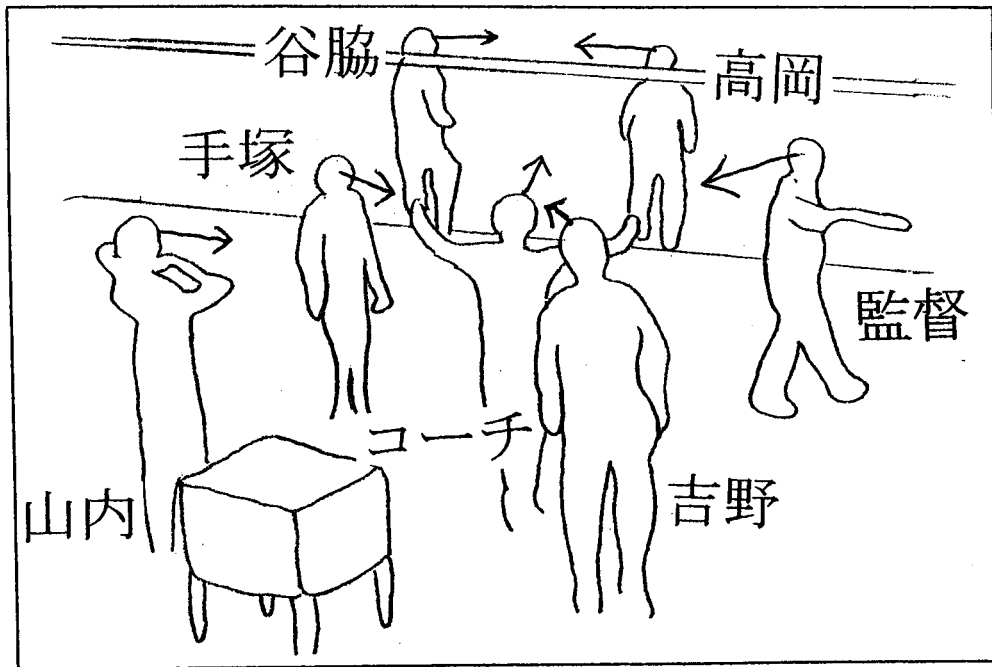


図4 コーチの動作 (矢印は顔の向きを表す)

コーチの指示に初めに気がつくのはコーチの方向を向いていた手塚である。彼女はすぐに、コーチと同じようにジェスチャー（手招き）で他のメンバーを入り口側コートに呼び戻そうとする（8：48：04）（図5）。

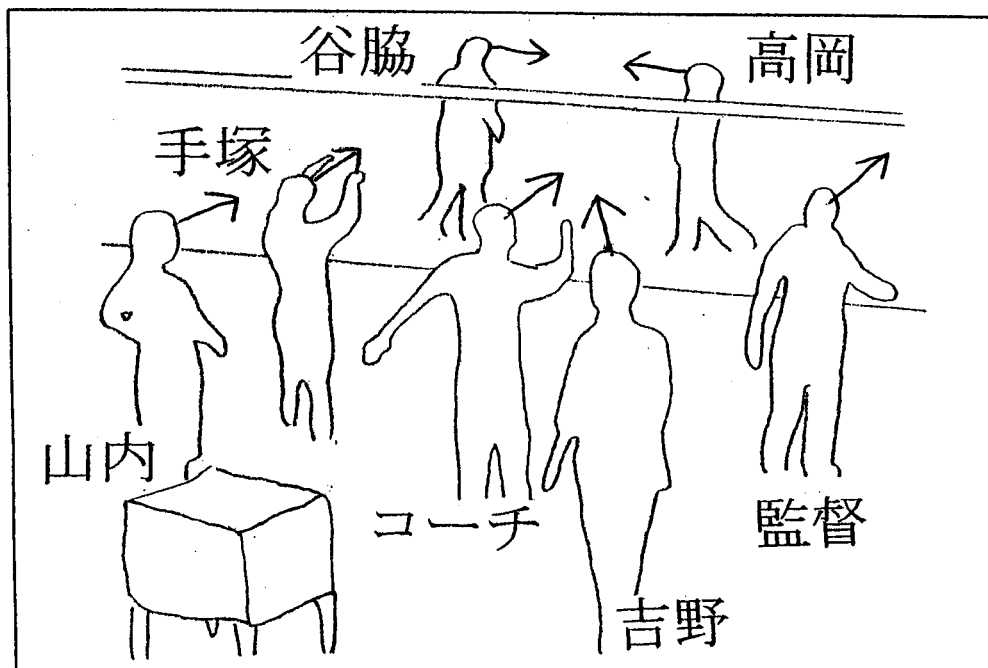


図5 手塚の動作 (矢印は顔の向きを表す)

この後、すぐにコーチに視線を向けた監督は、その意図を理解して手塚やコーチと同様にコート全体に対してメンバーを呼び戻そうとジェスチャー（手招き）を行っている。（8

: 48 : 07) (図6)。

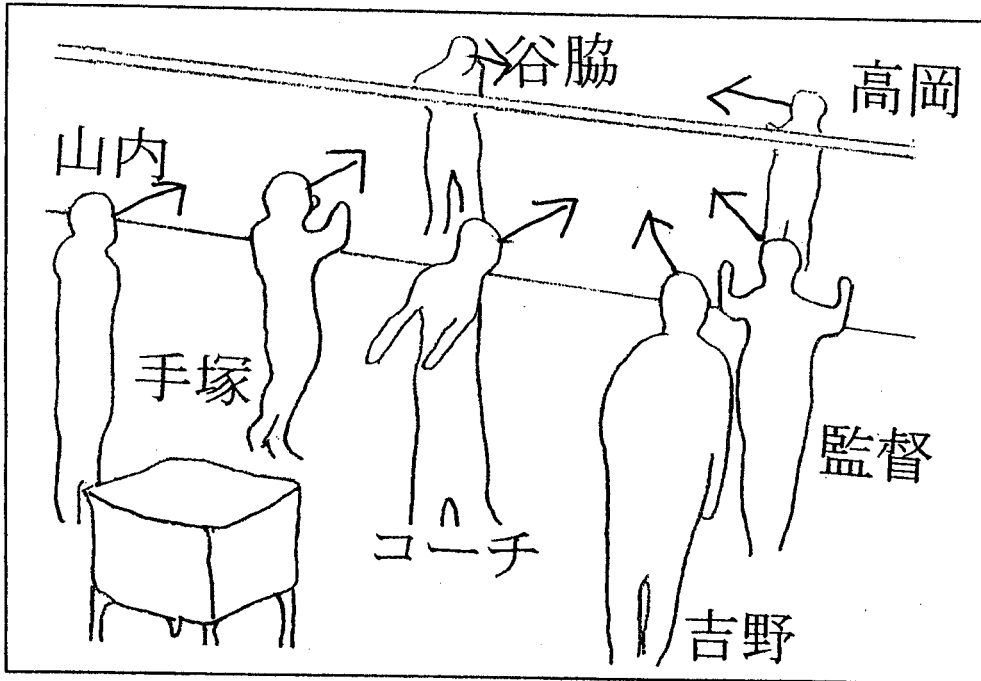


図6 監督の動作 (矢印は顔の向きを表す)

指示の伝達に時間がかかるのは、コーチから距離が舞台側コートにいて、コーチから遠い谷脇、高岡、小山、一枝の四人である。小山は監督とコミュニケーションを行っており指示の実行までに時間がかかる。

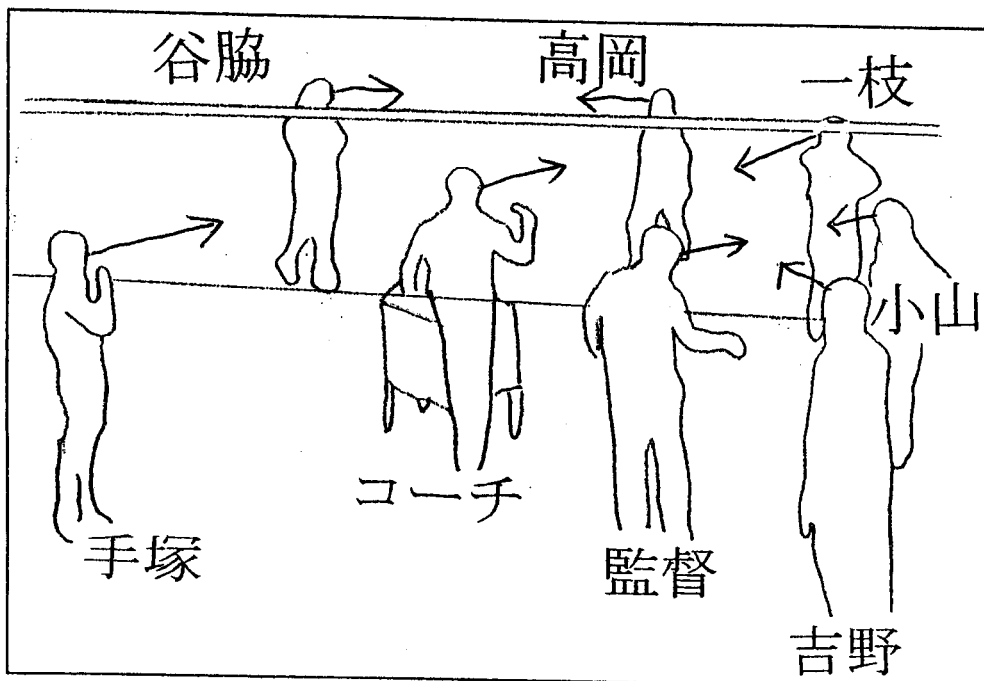


図7 コーチの一枝への指示 (矢印は顔の向きを表す)

しかし、この時点（8：48：10）では、すでに監督にコーチの指示が伝わっており、コーチも監督に指示が伝わっていることを認識しているので、コーチは小山には直接指示をしようとしな。一枝は監督の方を向いていたが、近づいてきたコーチの出した指示（8：48：14）（図7）を見てそれを理解し、移動を開始する。

谷脇、高岡の二人は手話でお互いに話をしており、指示が伝わっていないが、コートの変更の指示を認識して移動している一枝が谷脇の視覚に入ったときに移動を開始している（8：48：18）（図8）。

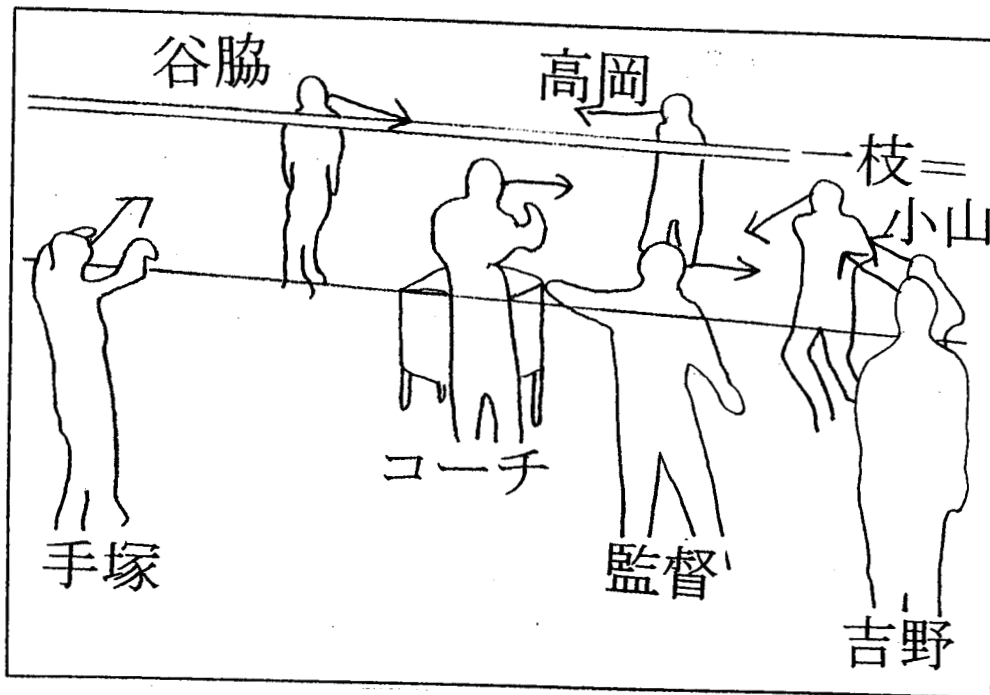


図8 一枝の移動を見る谷脇（矢印は顔の向きを表す）

この谷脇の移動につられるかたちで高岡も移動を開始する。このように、コーチの指示はその指示を理解した者に広がり、理解した者を通して、さらに広がっていく。

また、この場面において、谷脇と高岡の間にはカスケーディングと同時にリフレクションが起こっている。8：48：17から8：48：20にかけての時間帯は、カスケーディングによりコーチの指示がある程度、参加者に認識されている。しかし、谷脇と高岡の二人は手話で話をしているため、コーチの姿を見ることはなく、当然、指示は伝わらない。

偶然、一枝の移動を視界に入れた谷脇が一枝の移動する方向に同じように移動を開始する。谷脇に移動につられて高岡も同様に移動を開始する。この移動はコーチの指示を直接、コーチから伝えられたのではない。なぜなら、8：48：20には、二人は近づいてきたコーチに直接移動を指示されて急に移動の速度を早めるからである。

4. 考察

この場面で起きていることは、女性のチームが舞台側のコートに移動し、コーチの指示を受けて入り口側のコートに移動するということである。そして、女性のチーム以外のメンバーは、あたかも女性のチームの動きに連動して移動しているように、当初、入り口側のコートに滞留しており、女性のチームの移動が開始されると、入れ違うように舞台側に移動している。

仮に、コーチの動作そのものに「コート入れ替え」という明確な意味を認めるとするならば、その動作は、コーチの脳内に存在する意味の暗号化と解釈され、そして、それを受け取って行動に移ったメンバーはその暗号を解読した、とこのシーンを説明することになるだろう。

しかしながら、私たちの考察はそうした「暗号化—解読」という図式での解釈とは異なる。そもそも、私たちは相互反映性という概念でこの場面を考察するので、コーチの動作そのものに意味があることを前提に議論を始めることはしない。そのかわりに、以下のように考えるのである。

この場面において、このコーチの動作の意味は、メンバーに「コートの入れ替え」として知覚されてはじめて「コートの入れ替え」の指示となるのである。コーチの指示の意味は、前者の解釈のように、コーチの脳内にあらかじめ存在していたものではなく、メンバーによってその場面において形成された社会的達成物として解釈されるのである。

5. おわりに

マッキーブニーが示した (McIlvenny[1995]) カスケーディングとソーシャル・リフレクションは、視覚の様相を補償する現象であった。それは道具でも規則でもなく、観察可能な現象である。それがフィンランドのろうコミュニティに限られた現象ではなく、日本のろうスポーツの現場においても観察可能であったこと、つまり、フィンランド手話であるとか、そういう特殊性においてカスケーディングやソーシャル・リフレクションが成り立っているわけではないという観察を、私たちは提示した。

さらに、カスケーディングの場において、メンバーの情報伝達過程がいかんにして成り立っているのか、と言う疑問に答えるかたちで、エスノメソドロジ—的な観点から、その場における「相互反映性」の重要性を確認するに至った。

謝辞

この論文を書くにあたって、金澤貴之氏 (筑波大学心身障害学系)・中野聡子氏 (筑波大学大学院心身障害学研究科)・岡田光弘氏 (筑波大学大学院体育科学研究科) の三氏には、1999年8月の中間発表において貴重な意見と指摘を頂いた。なかでも金澤氏には、マッキーブニーの論文 (McIlvenny[1995]) を紹介して頂き、抄訳も頂いた。清原健司・

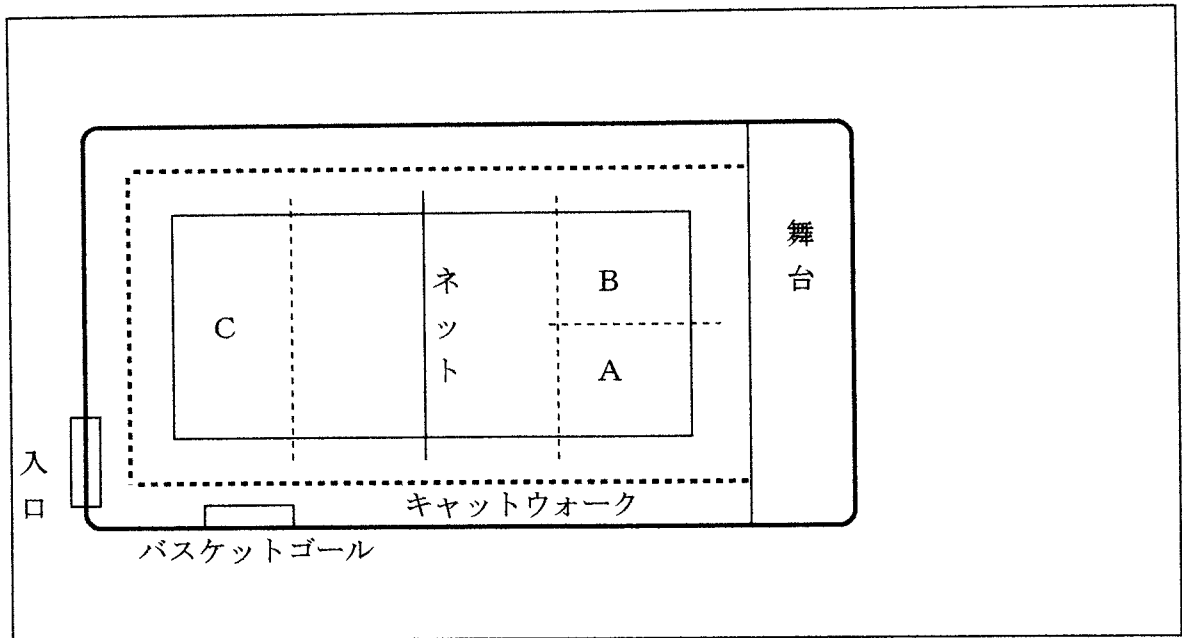
嘉美（とくしまボランティア推進センター）両氏には、分析に用いたビデオの内容、特に、手話の読み取りについて協力して頂いた。また、高木竜輔氏（徳島大学総合科学部人間社会学科）には、原稿を推敲する際に助言して頂いた。これらの助力なしには、私たちの研究は完成することはなかった。ここでお礼を申し上げたい。

参考文献

- Coulon, Alain 1996 *L'ETHNOMÉTHODOLOGIE*, Presses Universitaires de France.
= 1996 山田 富秋・水川 喜文訳、『入門エスノメソドロジー — 私たちはみな実践的社会学者である —』 せりか書房。
- 藤田 紀昭 1998 『ディサビリティ・スポーツ — ぼくたちの挑戦 —』 東林出版社。
- Gannon, Jack. R 1981 “Sports” *Deaf Heritage*: Jack. R Gannon National Association of the Deaf 271 - 316.
- 浜 日出夫 1992 「現象学的社会学からエスノメソドロジー」 山崎 敬一・好井 裕明（編）『エスノメソドロジーの現実』 世界思想社。
- 市田 泰弘・櫻田 美雄 印刷中 「言語としての手話・文化としてのろう」、『徳島大学社会科学研究』 13：（頁数未定）。
- 石川 准・長瀬 修（編） 1999 『障害学への招待 — 社会、文化、ディスアビリティ —』, 明石書店。
- 木村 晴美・市田 泰弘 1995 『はじめての手話』 日本文芸社。
- 木村 晴美・市田 泰弘 1996 「ろう文化宣言」 『現代思想』 24 - 5 : 8 頁 - 22 頁。
- McIlvenny, Paul. 1995 “Seeing Conversation : Analyzing Sign Language Talk” Paul ten Have & George Psathas (eds.) *SITUATED ORDER* : University Press of America, 129 - 150.
- 西阪 仰（編） 1997 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社。
- Psathas, George 1995 *CONVERSATION ANALYSIS*, Sage Publications. = 1998
- 北澤 裕・小松 栄一訳 『会話分析の手法』 マルジュ社。
- 総理府 1998 『障害者白書 平成10年度版』 大蔵省印刷局。
- 好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰（編） 1999 『会話分析への招待』 世界思想社。

第三部 付録

体育館概略図



今回作成したトランスクリプトで使用している記号一覧

[人物名] (全て仮名である)

コ	・・・	コーチ
監	・・・	監督
吉	・・・	吉野
谷	・・・	谷脇
高	・・・	高山
山	・・・	山内
小	・・・	小山
一	・・・	一枝
手	・・・	手塚

[その他]

A, B, C	・・・	コートそれぞれの場所 (概略図参照)
---------	-----	--------------------

障害者スポーツと人生

—障害者水泳選手へのインタビューの記録—

阿部智恵子 (徳島大学大学院)

1999年8月10日

瀬川博彦さん(仮名)インタビュー

X県内のファミリーレストランにて実施
インタビュアー 阿部智恵子(徳島大学大学院)

=プロフィール=

48歳

21歳の時、建設現場での事故で右足首の関節より切断(神戸にて)

T市身体障害者連合会理事

市の連合会の体育部長

平成10年C級水泳指導員講習を受け合格する。

家族(妻、子供二人)

X県出身

身体障害者水泳クラブ「シーホースクラブ」(仮名)に入会している。

妻も身体障害者水泳クラブ「シーホースクラブ」に入会している。

自営で仏壇の彫刻をしている。(障害を持ってから習う)

平成10年日本身体障害者水泳選手権大会に出場する。

[]内は筆者の補注

小さい時からの水泳との関わり

子供の時は、泳ぐというよりは、魚を釣ったりする程度でした。

成人になってからは、泳いでいなかったです。

障害の原因について

S市の建設現場で高層マンションの工事用の運搬(エレベーター)の歯車に挟まれて右足の甲を挫滅しました。それで、足首より切断しました。

20歳よりS市に働きに来て、21歳で事故にあいました。

けがをきっかけとして昭和51年故郷へ帰ってきました。

けがをするまでのスポーツ歴

会社でもなにもスポーツをしていませんでした。

20歳まで野球クラブで(3年位)草野球などをしていました。

「シーホースクラブ」との関わりについて

N市の身体障害者スポーツ大会がきっかけで「シーホースクラブ」を作りました。

平成5年位と思います。

それ以前より、障害者水泳クラブで女性たちが数人で泳いでいました。それに私たちが

加わって、名義変更をして「シーホースクラブ」となりました。

入会の条件は・市内在住であること

- ・障害者であること（程度、種類は問わない。）
- ・18歳以上
- ・内部障害は除くになっています。

私自身は「水泳をしてみませんか」と声をかけられ「します」といって入会しました。

障害後の水泳との関わりについて

けがの後、泳いでみると最初はほとんどクロールも平泳ぎもできなかったです。プールに入って、泳いでみて、『こんなに泳げなかったんだなあ』と思いました。

指導は水泳連盟のGコーチがしてくれました。他にボランティアの学生とか…。

泳ぎをしている人の動機はさまざまです。自分は「泳ぎませんか？」と声をかけてくれたので、泳ごうと思いました。

クラス分けについて

地方大会では、42クラスくらいあります。[平成10年までは日本身体障害者水泳連盟のクラス分けは42種目であったことを指すと思われる。なお現在は26種類に減少している。(松木直幸氏のインタビューの注2を参照)]

肢体が5項目、上肢(手)が4項目、聴覚視覚が3項目など全部でひっくるめて42～43あります。

全国大会では狭まります。上肢10あるものが、5つ位になります。人数が多いし、クラスが多くなり過ぎるので…。

クラス分けについての不満などはありません。本部が決めてくるので…。

うちのメンバーの中で、なかなか平泳ぎができない人がいます。足の甲で蹴ってしまうのでキックになります。泳法違反になります。

瀬川さんの大会歴について

中四国大会(地方大会)が年1回開かれます。今年は広島で7月11日にありました。

広島で標準記録を破ったが、仙台は[1999年度の日本選手権大会の開催場所]遠いので、行きません。

日本選手権大会が年1回あります。それに出るため、地方大会があつて、(九州、名古屋、広島、関東、中部地方)これには、誰でも出られます。

標準記録を達成して日本選手権大会があつて次にジャパン・パラリンピックがあります。

自分は、習い初めて1年位で名古屋の30回大会に出ました。平成6年頃に、クロールで3位でした。平成10年にも大阪の日本選手権に出ました。個人メドレー、背泳ぎ、どちらかでメダルをもらいました。記録は今覚えていませんが…。

やさしいのは、平泳ぎですが、自分はバタフライが難しかったです。

今は泳ぎをしていて、特に不自由な面はありません。

泳ぎを始めた動機について

泳ぎをしている人の動機はさまざまです。自分は「泳ぎませんか？」と声をかけてくれたので、泳ごうと思いました。

水泳の一番よいところについて

県外に出て、友達ができるところが楽しみです。全国、中四国、広島、高松などへ行きました。1年後にまた会えるという楽しみがあります。

自分は、そのまま（健康）で来たら、水泳もなにも、他にスポーツはしていなかったと思います。けがをしてからの方がスポーツに触れられたのではないかと思います。小さい大会でも、どこまででも行けるし…。メンバーも生き生きしています。明るい。交流もできます。障害者になって泳ぎはじめたことが、自分にとって大きいです。水泳は、水の中の、全身運動になります。

水泳のライバルについて

広島に一人います。その人は、大腿部切断（片足）をしている人です。クラスは違いますが一緒に泳ぎます。個人メドレーで自分の方が毎年負けますが、励みとなっています。

ライバルがあれば、普段の練習でも身が入ってできます。年1回ライバルと会う楽しみがあります。その人とは、普段はハガキを出すくらいです。

家族について

妻も3年前から水泳を始め、一緒に泳いでいます。平成12年に富山県で全国身体障害者スポーツ大会が行われるのでそれに出場したいと思い妻と一緒に一生懸命泳いで練習しています。

子供たちは、「一生懸命がんばりなよ」と言ってくれます。子供は、女の子ばかりで24歳と23歳です。子供は水泳をしていません。あまり応援には来ませんが、今年、5月にK町で水泳大会があった時、下の子が応援に来てくれてビデオを撮ってくれました。

普段の練習について

以前は公共施設で毎週火曜日（18時～19時）に練習していましたが、今は、工事中なので、泳ぐところがないので、お願いしてS施設で泳いでいます。

9月か10月には、直るでしょう。S施設では週1回、木曜日の（19時～20時）に障害者だけの貸し切りです。5コースあります。

公共施設では5コースありますが、貸し切りではなくて、1コースしか貸してくれないので泳げない人は、コースの中で泳ぎ、他の人は健常者と一緒に泳ぎます。

本当は、貸しきりの方がいいです。

Z町のプールへ行っている人もいます。温水プールでチューリップ公園の横にあり、健常者と一緒に泳いでいます。

職業について

自営で、仏壇関係の彫刻をしています。障害を持ってから習いました。

スポーツや水泳をする上で気をつけていること

事故とか、けがですね。あつてはならないことですが、足をすべらせてこけるとか。身体が不自由なので [気をつけています]。

事故後のリハビリについて

足首切断だけなので自分はリハビリをしていません。

一番リハビリをしている人はFさんという人です。Fさんは「シーホースクラブ」に入った時には、プールで上へ上がる時にも上がれなかったくらいでしたが今は全然違います。自分が、身体を作ってきたからすごく上達しました。

スポーツする前後で、変わったことについて

仕事の面をきちっとしてから、練習に行くようになりました。計画的になりました。日常生活に張りや目的、目標ができました。

これからの夢・抱負について

障害者がもっとスポーツに関心を持ってほしいと思います。引込み思案であったり、後ろむきであると思うことがあります。一般の人の理解も悪いように思います。もっと近寄ってほしいと思います。

もっともっと水泳人口を増やしたいです。50名位にしたいです。人数が増えても、県の方の助成金は一定なのですが…。

障害者の会の時に、障害者の方に会うと水泳を勧めています。しかし、反応は、いまひとつです。はだかになるところや、人に見られるのを嫌がる場所があります。いろいろな人に言ったけれど、入らない人もいます。入ってくれた人もいますが…。1回入ったら、やめたりする人は少ないです。

今後はスキーをしてみたいと思っています。今までは全然したことはありません。他のこともしてみたいと思います。

私自身は、もっと早くスポーツをしていればよかったと思います。

今、一番ほしいものについて

温水プールが一番ほしいです。公認のプールが市内にできたらよいと思います。

広島は温水プールが福祉センターの中にあり、いつでも使えます。時間帯で一般公開もしているようです。

県のT町の建て替えは、プールを作るのも、敷地の問題があります。

一昨年、あるファミリーレストランの部屋でA市長にコーチ他30名で温水プールを作ってほしいと陳情したが、答えは芳しくなく、実現しませんでした。

スポーツをする上で自分に影響を与えた人について

人で言えばGコーチです。「シーホースクラブ」がGコーチにお願いして教えに来てもらっています。その他には、会長さんやMさんです。Mさんは、今年定年退職しました。

Mさんは学生の時に爆発事故で両手を切断したそうです。

今後の水泳との関わりについて

泳ぐことができるまで続けるつもりです。関係が切れないです。水泳ができなくなると思う時は自分のからだ泳ぎに適していないとわかると思うのですよ。そこまでは、絶対続けてみたいです。75、6歳まで泳いでいるかもしれません。

スポーツを通じて人に伝えたいことについて

障害者スポーツをする人が増えてほしいです。視野が広がり、友達もできるからです。昔と比べると、障害者スポーツは広がってきたと思います。

今後の予定について

今年はとくにありません。

来年は名古屋で中部大会があり、それに出てみようかなと思っています。来年6月ぐらいだと思います。

来年中四国大会が高知であります。たぶん7月か8月位です。

目標としては、個人メドレーで1分50秒の壁を破りたいと思っています。今は1分52～53秒の間です。全国には1分30秒で泳ぐ人もいます。

水泳と私について

去年1年間、5月からGコーチの紹介でC級の水泳の指導員の講習を受けました。

検定が昨年11月3日にあり、合格させていただきました。あとNHKの通信教育で教材7科目(C級の指導員)中2科目不合格。追試験を受けて、今年になって受かりました。1年間みっちり勉強しました。認定証が出たら、名刺に入れようと思っています。今、市の身体障害者連合会の体育部長をしています。

指導員が少ないので、十分コーチできないためメンバーを見てあげたいです。

A級は世界に出る人のコーチをする人、B級は中学生、高校生を指導する人、C級は初めての人を指導する人です。

日本水泳連盟の検定を水泳で4種類泳げれる人なら受けられます。他に県の障害者指導員があります。

障害者を指導することは、意義があると思っています。教えた人が、上達するとうれしいです。スポーツ講習会が今年より1回あります。これは、市の障害者対象でスポーツを5種類位紹介します。自分も講師をします。連合会でしていることなどを紹介します。

9月5日、15日、19日の3日間、Z町で講習会を「シーホースクラブ」の会が開きます。9時から12時までの予定です。それは、11月に一人熊本大会(全国大会)に出る人のための講習会です。水泳と身体障害者の会が日曜毎にあり忙しいです。

【瀬川さんのインタビューについての分析】

人生にとってそのものが、価値があるかそうでないかの違いは、それがどのようにして

あらわれたかによるだろう。障害を持つ前の瀬川さんにとっては、水泳はあまり親しみのあるスポーツではなかった。しかし、障害を持つことによって、水泳と出会えたのである。これはまさに、『転機としての障害』と言えることができるだろう。人生のライフコース上で人はいくつかの『転機』に出会う。転機にであった時に今までの人生と接続のよい生き方を選び取っていく。

成田真由美氏（アトランタパラリンピックの水泳種目での金メダリスト）は次のように語っている。「障害を持つ前はできなかった水泳を、障害を持ってからできるようになったことを思うと、人間の可能性ってすごいなあって感じます」（藤田[1998:106]）

瀬川さんにとっても、水泳は『障害があつてこそ出会えたもの』として価値を持つ。これは、障害の肯定化に役立つということが言える。

一方では瀬川さんは「障害者スポーツ指導員」をめざしている。これは、障害からの離脱をめざしていると解釈すべきだろうか。「障害者を指導する障害者」として生きていこうという折衷的・妥協的意欲がここにあらわれているということは、言ってもよいように思われる。

水泳クラブの創設に関わったり、今でも会員の加入、施設の充実にも気を使っている彼からは水泳クラブを通して障害者コミュニティを作っていこうとする意気込みも感じることができる。

この事例は「障害」をきっかけに能力を発揮してリーダーになっている有能な人物の例であるとは言えよう。

1999年7月10日

石田憲市さん（仮名）インタビュー

都内の喫茶店にて実施
インタビュアー 檜田美雄（徳島大学）

=プロフィール=

52歳

腎臓透析患者（内部障害）

糖尿病に由来する視力障害（全盲）

妻も身体障害者

生活保護を受けている

白杖会の会員（40歳から）

元フォークリフトの運転手

ガイドヘルパーの介助で水泳大会に参加

水泳クラブには属していない

東京都障害者スポーツ大会に毎年出場

[]は筆者の補注

水泳に関して

水泳は3年前の50歳になってから始めました。水泳の他は散歩をするくらいです。

もともとのスポーツ歴は、中学校から水泳をやっていて、高校1年で中退するまで水泳部でした。競技歴は100メートル自由形、200メートル自由形、それとか個人メドレーあとは学校が主体だから、400メートルリレーとか、メドレーリレーとか。メドレーリレーの時はバタフライをやっていました。自由形じゃなくて。本当は自由形が担当なんだけど、バタフライは他の選手が速くなかったから。そのときの成績は大体神奈川県で一位、関東大会で四位、全国大会では予選で落ちてしまいました。個人メドレーでは四年間負けたことがなかったです。大体クロールができる人は平泳ぎが遅いんですが、自分は平泳ぎもクロールも両方得意なのでよかったです。バタフライとか自由形というのはそんなに差がつかないんです。

障害者スポーツを始めたのは、同じアパート[区の福祉集合住宅]に住んでいる女の子がシンクロナイズドスイミングをしていたので自分も水泳をしようと思ったからです。[再開の]一番初めは、満身に泳げませんでした。全然泳げないから、進めないからビート板を持って、ばた足から始めました。二回目から泳げるようになりました。50メートルはなんとか泳げるようになりましたがやはり若い人が速いです。体力ありますしね。障害者になって、まだバタフライとバックは[大会で]一度も泳いだことがありません。バックは練習しても最初はおかしかったけど、様になってきたから試合に出れるなと思いますが、バタフライは無理と思います。バタフライが一番、体力を使うし、疲れるからです。足を

バタバタさせるのがバタフライじゃないんです。腰から使わなければだめなんです。形ができていないと泳げない。

練習について

日頃は近所の区立体育館で行っています。あそこは障害者はただで入れるんです。大体週1回水曜に行っています。一時間で300～500メートル位泳ぎます。クロールと平泳ぎをしています。歩いていくから、雨がふると行かないんです。歩いていくから疲れちゃうから。貧血がひどくなると歩けなくなっちゃうんです。ぐたーとしてね。

障害について

目が不自由になったのは40歳くらいからです。今、全盲だけど、そのときは0.01あったんです。42歳くらいまで白線が見えるから杖で道路が歩けました。自分の家から障害者会館で歩行訓練をやってくれます。一番初めから一人で歩かされました。先生が後ろについて。道は頭の中ではわかっています。大体状況がわかっています。オートバイが止まっているところは大体決まっています。道路だって「あと一本」とわかります。本数を数えていないとわかりませんが。店の名前は看板に杖があたると、大体わかります。スーパーマーケットがあるなどというのも頭の中に入っているから。時々家の確認をしないガイド[ヘルパー]が来ます。うちがどこかわかんない。そんなん来ても困りますよ。透析病院はわかりますが、「公園の先を左に曲がってくれ」と言っても、公園の手前を左に曲がるので着きません。いい人もいるんだけど。今年は練習量が少なかったんです。貧血が苦しかったから。今年は体調が悪かった。私は透析患者だから、貧血が強いとどうしようもないんです。透析やっていると貧血は一生の付き合いだから。もう治らない病気だから。正常は31[%](注1)なんだけど、今21[%]位しかない。昨日はかって21[%]でした。貧血だから、ちょっとひどいんですよね。透析は火曜日と木曜日と土曜日に行っています。三年前は、市民大会も内部疾患があったんです。内部疾患で出る人が少ないから、なくなったんです。知らないから、初年は、目の障害で大会に出ました。大会では目の障害が速いんです。障害者で透析患者で泳いでるのは、自分くらいですよ。普通は泳ぎませんよ。貧血21[%]もあるのに。医者からは、軽い運動はいい。無理をしなれば大丈夫だって。がんばって無理をしちゃうとだめなんです。

ライバルと仲間たち

ライバルの67歳のKさんに今日は負けてしまったんです。普通だったら、あの人には負けないんだけど。今日は60秒かかってしまったんです。今日は右腕が上がらなかったから、これでは負けてもしかたないなど。今日は調子は確かによくないけれど、負けると思ってなかったんですけれどもね。体調がよければ泳げるはずだから。今日は寝不足でだめだなど思いました。泳ぐ前から参っちゃって。クロールを泳いで。すぐ平泳ぎでした。Kさんとは、大会などで話はするが、日常のお付き合いはないです。

区の盲人会で白杖会という会があるんですよ。そこには65歳以上でないと入れないんだけど、私は40歳くらいから入っている。86歳のおぼさんが入っていて、そのおぼさんが連れて行ってきて40歳だと会員になれないんだけど、「なっちゃえ」って言って会

長が「お婆さんの友達だからいいよ、会員で」ということで10年たちました。会があって、「試合があるので出ないよ」と言うと、白杖会の人が「応援に行く」と言い出して。来ても見えないじゃないですか。「来なくてもいいよ」と言ったんだけど。来なかったけど、そこまで言われちゃうとなんとかしなくちゃしょうがないなと。白杖会は、川柳と民謡と俳句、大正琴、四つ位あるんですよ。川柳と民謡に出ている。聞いてあげるだけです。教えてくれるから。新しく入ってきても、自分が早くから入っているの古株です。

スポーツをする上で気をつけていること

あまり気をつけていることはない。疲れないようにというのが条件なんです。あまり無理はできませんから。25メートル泳ぐと5分くらい休む。その繰り返しです。一時間しか泳がないけれど、正確には50分、最後には、疲れてどうしようもなくなる。手が動かなくなる。水をかけないから、これはどうしようもない。いい時と悪い時がはっきりしている。今日は調子いいとか、すぐわかります。25メートル泳いだら、今日は悪い方です。生活上の工夫もなにもしていない。家の中で、自転車こぎをしている。夏は泳ぎに行かないから。毎年4月から泳ぎ出します。毎年7月まで。今年は8月まで泳ぎます。S区の大会があるから。

水泳のルールについて

盲人は、真っすぐには泳げない。真ん中を泳いでいれば、顔を左に上げると、右に曲がる。左と右を交互にする。今日は25メートル息なしで泳ぎました。去年は飛び込みでおっこちゃいました。浅いから。浅いから頭を打ってしまうんじゃないかと思って。S区の練習場は、飛び込み禁止で練習ができない。練習の時には、下から出るから、大体、感覚でわかる。もうすぐというのは、感覚でわかります。こわくはありません。手を突き指したりすることは、三年間泳いでいて、1回もありません。ゴールは見えていないんだけど指示棒(注2)は使っていません。障害者のコース、右側通行とS区では、ぶつからないようになっている。お婆さんたちは歩いているだけだから、よけてくれるが、子供だと困る。お婆さんだったらあたらよけてくれるが子供はよけてくれない。監視員がいるので、子供に文句を言ってくれる。

家族について

私は50メートルを30秒で泳ぎますが、小学一年生まで一緒に暮らしていた私の息子はもっと速いんですよ。100メートル56秒ですもの。36年か37年前の話だけれど、私たちの時代は1分7秒で優勝できました。その時は100メートル1分きると世界新記録でした。

体調について

先週月曜に病院に行って、水曜に行ったら、血が止まらなかったんです。ここに針を刺すんです。[医師に]泳がない方がいいと言われました。貧血で21[%]でした。

体調が悪いと、眠りにくくて3時に起きちゃって、テレビのイヤホンをつけっぱなしで、寝ようかと思ったら、寝られなくなっちゃってね。今日は寝ないまま来ちゃったよ。

私も迷惑だよ。いつもこんなに「来るのが」嫌と思ったことはなかったです。

食事療法について

水分を一日 750 ml にコントロールしています。水分の制限は大切です。リン・カリは制限がきついです。肉 70 g、魚 80 g。昨日栄養士が来て、肉なら 100 g 食べなさいって言いました。今、貧血が強いからね。自分でやる気にならないと「だめなんです」。「糖尿になって」始めの 4 年間はなにもやらずに、やり放題のことをやっていました。栄養士の指導もあったけれどスイカなどをとっていました。

腹のたつこと

大きな声を出すには、出すだけの理由があるんですよ。「大きな声を出した」とそれだけしか言わないわけです。大きな声を出したら、「あんた大きな声だしらいけないのよ」と言われるんです。

これからの抱負について

50 歳から 60 歳になるまで泳いでみようかと思っています。あと 8 年。その前に負けたらやめてしまおうかと思っています。クロール負けたって平泳ぎがあるから。バタフライはできないけれど、バック泳げれるようになりました。調子良くないと K さんに勝てないからね。去年から負け続けている。今日は負けてもしようがない。原因がなくなりゃ勝てると思うから。25 メートルで息切れしちやったんです。去年と同じ位に泳げたからまあまあじゃないかと思っています

【石田さんのインタビューについての分析】

水泳は石田さんにとってどういう意味を持つものなのだろうか。そこから分析を進めていきたい。インタビューの中より彼を水泳に向かわせる要因については次ぎのことが言えると思われる。

- ①家族、とりわけ先妻の子供が水泳をやっていること
- ②昔はかつて水泳の選手であり、誇りの回復に役立つ
- ③白杖会という障害者グループのアイドル的存在であり、自分の存在価値を上げる。
- ④水泳のライバルを持っており、競技の面白さを実感できる。
- ⑤病気で生活保護を受けている自分がすべての自分でないんだという思い。
- ⑥妻に対しても他人に対しても闘う姿を見せることで『強い自分』をアピールすることができる。

自分の過去の人生が価値あることを確認するためのよすがとしての障害者スポーツ水泳なのである。未来に向かって自分の現在を作り出すのではなく、過去に向かって自分のありようを一つの物語りとして完結させるために自分の現在をコントロールしようとしているのである。特に中途障害の人にとって比較的重要なことは、現在をコントロールして、より完全なものにするという側面である。

過去にトップスイマーであったとしても、現在、泳いでいなければ意味を持たない。白

杖会においても今、石田さんが泳いでいることによって、石田さんの存在を価値づける理由になっているのだろう。また石田さんは中途障害に関わらず白杖会という盲人コミュニティを持っており、その仲間たちがコンボイ（注3）として存在することにも注目したい。

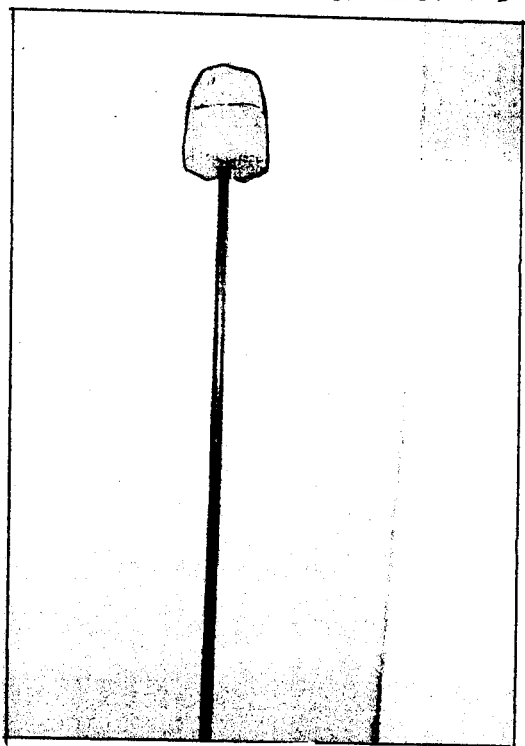
石田さんが盲人スイマーであれば使う指示棒を使わないのは、他の能力をすべて使ってスポーツをやっているという証拠である。これはものすごい集中力を必要とするし、日頃の鍛練が重要である。ターンを教えてくれる人がいなくても、ゴールがわかるためのコーチがいなくてもかかわらず、水泳をしていることを通して、今の人生を水泳にかけているということがわかる。

このインタビューで明らかになったことは、水泳をしている人は、それぞれ 固有の意味づけに基づいて行っているという事実であった。

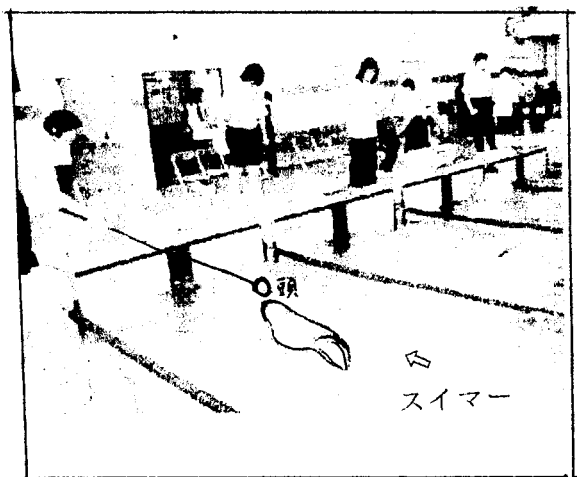
（注1）これはヘマトクリット値の値であり貧血の指標として用いられる。貧血とは、流血中の赤血球数（RBC）、血色素量（Hb）、ヘマトクリット値（Hct）の全部または一部が低下した状態をいい、通常RBC $350 \times (10^4)$ 以下、Hb 10 g/dl 以下、Hct 35% 以下を貧血と言う。

（注2）通常の盲人スイマーは、練習中であってもターン及びゴール前、1メートル位の適当なところで、別添（写真1）のような1、8メートル程度の指示棒と呼ばれる棒で、水路が終点になっていることを教えてもらっているが、石田さんはそのような援助なしに、水路の終点をわかるところでは主張している。このことの意味については分析に詳述した。

（注3）ここで言うコンボイとは「日本人の生き方」（岩波書店 1985）の著者であるD. W. プラースが提唱した『人生を共に歩くみちづれ』の意味である。



指示棒（写真1）



使用例（写真2）

1997年7月10日

岡本和美さん(仮名) インタビュー

都内の喫茶店にて実施
インタビュアー 岡田光弘(筑波大学大学院)
阿部智恵子(徳島大学大学院)

=プロフィール=

50歳

幼少時より脊椎カリエス

38歳時クモ膜下出血発症

実姉と二人暮らし(姉は2歳年上)

67歳(2年前)で実母が死亡

水泳指導員

障害者通所授産施設「H」の指導員(注1)

失語症(注2)

東京都スポーツ大会に出場

[]内は筆者の補注

水泳について

大会などでメダルをもらった時には、すごく感激したし、東京大会の主体下にあったけどなんていうか「全国大会に行けます」って言われた時はすごく感激したんです。でもどんどん[参加]すると、そんなに、たいしたことじゃあなかったんです。

全国大会には一度だけ参加したことがあります。一回行くとその後は行けないんです。

東京都だからすごく競争率が高いんですって。全国大会に言った時にはすごく感激しました。自分が障害があつてこんなのに[いいのかなー]と書いていたんですよね。だけど、いけて言ってくれたら、ちゃんと補助金を出してくれて行けてよかったと思いました。

でももっとなんというかすごい障害が重い人がいっぱいいるということが、すごいなーっと思ってなんていうか、前は涙が[流れて]すごかったの。感激したのじゃなくて、私よりも不幸な人がいっぱいいるんだなーっと思って。東京大会でもいっぱいあるんですけどね。あーっと思って、すごいっと思って。こいうふうに[涙が流れるように]なっちゃうの。みんなで一生懸命やると、すごくわたし[涙が流れて]こうなっちゃうんですとね

もっとねー、なんていうかなー、私なんかまだね、なんていうか、恵まれているんですよね。成田真由美さん(注3) オリンピック[パラリンピックのあやまり]に出た人です。アメリカに行った人なんですけれど、あの人なんか半身四肢の麻痺なんですけれど、すごいんですよ。不幸じゃないけれど、障害を克服しているだけけれど、もっともって[私よりも]重い人ばかりなんですよね。世界中の人達[の中で]でも、優勝したんですよね。すごいなーっと思っています。だから私の先生がね。「あんたもやらないといけない

よ。ダメ！ほらもっとやるの！」って言われるんだけど。ちょっとウフフ。私、もう歳だからね。あんまり無理しちゃいけないなあって[思うんです]。

38歳の時にクモ膜下出血になって「おはよう」も言えなかったんです。口が全然重かったんです。言おうと思っても言葉が出なかったんです。お母さんが、「これじゃあだめだ」と言っ、金沢のU病院へ入れてくれたんです。3カ月。そうしたらそこで水泳があったんです。「あーいいな」と思って。そこへ行って、それ終わったら、A町の高校に、水泳を教えてくれるところがあったから、「行きたいな」って思ったけれども、そんなことは自分ではできない。仕方がないわと思っていたら、「先生に頼んでいけばいいじゃない。」とお母さんが行って、「いいですか」というと「いいですよ」とその先生が行って、あーいいなって思って行ったら、その先生が、障害者のスポーツ指導員の資格があるから、「あなたこっちでいろいろ東京都の大会があるから出てみませんか」と言われて[大会へ]出たら優勝になったんです。

指導について

障害者手帳はいつも持っています。指導員証も入れています。自分はA町で教わった先生にまだ教わっています。この先生も非常勤なんです。指導員の更新は1年毎にしなくては行けないんです。認定があるんです。今、中級でこれが終わったら、上級にいかうかなと思っています。あーその手帳には上級指導員になっていますけれども、改正があったんです。認定には7日間の講習があったんです。教室に出ても、試合に出ても、講習に出ても、それぞれが実績として加算されるんです。指導員としての講習だから、障害を持っている人も、障害のある人も一緒に講習を受けているということなんです。ゴール・ボールとか陸上も書かれています。私はできませんけれど、役員や審判をしたり、弁当係とかあるんですよ。大阪に行った時は、弁当係だったんです。ゴール・ボールはどのようなものですか。それはもう、なんていうか、すごくはげしいです。目の見えない人は、耳で察してすごいの。ロートレースは目の見えない人人と見える人がコンビでリレーをやるんです。指導員の資格を取ったのは、指導員の資格を取っている先生に教わったことも影響しています。

身障者スポーツについて

A町でも[障害者スポーツ]はあんまり優遇されていないですよ。本当はね。[目の]見える人達はいいかもしれないけれど、私たちの身体障害者ということを理解してくれない人ばかりなんです。もっともっと、[目の]見える人もみんな、[目の]見えない人もみんな、一緒にやらないといけないと、私は、すごく感じているんですけど、やっぱりまだまだすごいな[できてない]と思います。今日の大会でも、知恵遅れの人と身体障害者の人の出場する日を分けていましたが、本当は一緒の日をやった方がいいんですよ。本当はね。本当は分けたのは、すごく違うのにな。みんなでやればいいのにな。いろいろあるんだなと思って。オリンピック[パラリンピックのあやまり]が長野でありましたけど。本当はみんなでやらないといけないんだけど、前から知恵遅れの人とそうでない人とは一緒にやらないといけないんだけど、分かっているんですよ。でも少しは、改正になってきたんですよ。今、一番すごく変だと思っていることは、学校が障

害者と普通の人を分けていることなんです。本当は自分は違うなーと思っていたんですけどね。自分はどんどんみんなで作らないといけないと思っているんだけど。やっぱり、不幸の度合いがあるかもしれないけれど、本当には、正常でいても、みんな一緒じゃなきゃいけないのに。私はそれが一番、変だなあと思っています。水泳のクラス分けについてについてですか。そういうものなんだろうという感じですね。同じメンバーで泳いでいます。入れ替わったりはあまりないんです。

何か他のスポーツをしているかということですか？水泳が一番なんというか 一人でやれるんです。テニスだったら二人でないといけないでしょうし、それと〔水泳は〕一番お金がかからないんです。ウフフ。〔他のスポーツ〕はやっぱり、なんというかお金がかかりますね。障害を持ってからは、給料も半分ですしね。

生活歴について

結婚前は幼稚園の先生で、ある大学に入って、助手をしていて、その後、結婚をして専業主婦になったんです。専業主婦は10年間してました。専業主婦の間は奥様の遊び程度の水泳をやっていました。結婚して水泳サークルに入ったんです。水泳は小さい時からちょっとはやっていたんですけど、あんまり運動はしなきゃいけないと言われていて、大学時代は運動をスキーも含めていっぱいするようになりました。S学園に入ってある大学の助手をして、事務職に就いて、先生も大体同じ時期にしてその後、結婚しました。水泳は結婚した後で、水泳のスクールに入って、たまたまやっていたけれども、そこから本格的にやっていて、リハビリの時にもう一回水泳に出会ったんです。

今はT病院に通っているんです。それは、水泳を教えてくれた病院です。温泉もあるし、すごく設備もいいところです。一カ月に一回診察があるんです。言語療法の方は、卒業しているんですけど。字が書けないんです。漢字だったらまだいいけど、こういうひらがなはだめなんです。水泳は障害者の補助をやったり、自分で泳いだり、大体週2回位はプールに入っています。

身体の方は、大変で、左側は熱いとか寒いとかを感じません。だから自分でお茶を入れる時は左はだめなんです。お風呂もこっち〔左側〕から入ったらだめなんです。〔食事の〕後片付けは私の仕事なんだけれど、お姉さんに、「もうすこしちゃんと洗ってくれないとだめ」と言われます。うちのお姉さんも離婚していて私と二人暮らしです。お姉さんには子供が二人いて、私はいません。姉の子供は二人とも、自衛隊に入っています。

家族について

〔両親は〕東京なんですけれど、北海道の夕張で生まれました。その後、うちのお父さんはK建設、そこでずっと働いていました。札幌とか、新潟とか軽井沢とかそういうところに支店があったんです。転勤があったらうちは〔家族が〕みんなついて行くんです。

本当はしたらいけないんですけど、小さい時にはドッジボールをしていました。お母さんに〔だめ〕と言われたけれど、隠れてやっていました。

姉とは二つ違いなんですけど、私がカリエスだったからすごくお姉さんに迷惑をかけたと言われました。「あんたは小さいときたいへんだったんだから。もー」って言われます。私も「いいじゃない。私が好きでなったんじゃないんだから。」と言り返すんです。小さ

い時にはあまり自分を病気とは意識しませんでした。障害者だから、閉じ込めて外へ出さないということは他にはあったようですが、私はお母さんと「なんでもいいからどんどん外へ行っちゃえ」と言う感じで。外へ行ったんですよ。早稲田大学に入った人で乙武さん（注4）もお母さんがすごく大変だったでしょう。そうだなあって思います。私〔のお母さん〕もそうでした。乙武さんのお母さんも乙武さんを一生懸命育てようとすごく大変だったでしょう。私のお母さんも大変でした。私のお母さんもお父さんももう亡くなっています。お母さんも大変だったけれど、お父さんも経済的にちゃんと一生懸命やってくれていました。だから、私は恵まれていたな一って思います。

学校は普通の地域の学校へ行ったんです。いろいろあったんですよ。お母さんが、怒鳴りこんでいたりしてね。私も忘れたこともあるんだけど、その普通の高校はだめだとか言われて。〔こちらは〕そんなことはできませんって言って。いろいろあったんですよ。小学生になる時にも一人の先生が〔障害があるから〕と言って大変だったんだけど、別の一人の人〔先生〕が、「みんなでやれば、できるようになるんだから」と言って入学できたんです。そんなことがあったんですよ。

小学校時代は障害があるからとっていじめられたことは、なかったです。私は楽天的で「なんでもいいわ」と思う方なんです。〔私は〕本当に恵まれていたんですよ。いつも〔誰かが〕助けてくれる。内緒でなんだってやってくれる人がいるんです。夕張に生まれて、洞爺湖、札幌、高学年で東京に来たんです。東京と北海道では北海道の方が暮らしやすいですね。でも今は変わっているでしょうね。全然、行ってないけれども。

両親は東京の出身なんです。コルセットをいつも東京に行って、作って帰っていました。今みたいな、義足みたいなんじゃないから、地方ではそんなことはできないと言われて半年に一回くらい〔東京へ〕来ていました。忘れちゃったけれど、すごく大変だったんです。うちはお父さんも大変だったけれど、お母さんは子供をあっちへやったりこっちへやったりすごく大変でした。お母さんは2年前に67歳で亡くなりました。お姉さんと仲がよいかですか？そうでもないけれどね。

私、脊椎カリエスがあったでしょう。だから、そんな差別は受けていたんだけど、知らん顔というか、そんなに重荷じゃなかったんです。みんな主婦でそういうの〔クモ膜下出血〕があったら、もう泣きつづけて、すごくすごく泣くと思うけれど。〔私は〕そうじゃなくて「しょうがないんだ。自分で克服していかなければいけない」と思ったんです。うちのお母さんが2年前に亡くなったんです。〔そのとき〕あーそれじゃあ、もうしょうがないんだから、不幸じゃないんだということを感じたんです。障害者の水泳が支えにもなりました。障害者の仲間たちといるとみんなリラックスしています。だってみんな同じですから。私がリーダー的存在ですか？私はリーダー的存在ではないです。だっておしゃべりもできないのに。

ニーズセンターH「障害者通所授産施設」

12、3年前にできたんです。前は施設だったんですけど、今は独立して障害者通所授産施設になっています。平成8年社会福祉法人 R福祉会が設立認可され、社会福祉援護施設ニーズセンター「H」が設立されました。60名の利用があり、園芸、陶業、売店営業、喫茶店営業などが主な授産種目です。送り迎えは家の人をしています。

私は月 2 回位行って指導をしています。[障害の] 重い人もいるので大変なこともあります。やっぱり大変なんですね。お金、指導者とか私とか動ける人はちょっとだけですね。

今後について

私はもうね、これをやりたいんです。障害者の補助をいろいろやりたいです。水泳は自分でも続けます。パラリンピックの大阪に行こうかなと思ったけれど、ちょっと補助で行こうかなと思ったけれどお金があまりないから止めます。補助はお金が出ないし、それと私、記録はのびないから。私にはしてくれないので。年齢別みたいのはありますが、東京都だったら 40 歳から。それで分かれています。あんまり年寄りになるとね。

【岡本和美さんのインタビューについての分析】

岡本さんは語りの中で過去、母が自分にしてくれたことなどを話すことにより「今」の自分があるべき姿として物語っている。幸せな過去を語ることにより、今の自分の存在を意味または価値づけているということが言える。人は自分の人生の過去の人生を、そのときそのときの、今にあわせて、強調点を変えながら語るができるのである。[「私は恵まれている」という言葉の多用に注目]

障害を持つこと（マイナス面）が社会化の一面であるとするならば、スポーツができることや、障害者でありながら障害者を指導する立場に身を置くことは、社会化のプラス面としてとらえることができるであろう。

岡本さんは「水泳は他の競技においてお金が一番かからないし、一人ででき、成績の良し悪しで他人に迷惑をかけないでよい」と言っている。そのことから、水泳は他の競技に比べ、独立性の高い競技ととらえることができるであろう。

水泳仲間はたくさんおり、話もしているが、東京都障害者スポーツ大会においても、自分の競技が終われば、仲間を応援することなくすぐ帰るところにも、彼女の独立独立歩という姿を伺うことができると思われる。ここで明らかになったこととしては、障害をそれも幼少の時に持った彼女が姉の保護の下で「健常者としての自分」を保持し、のちに二重障害となった時、自分を改めて、障害者の中でも健常者に近い存在として位置づけ直していたところが重要だと思われる。例えば、障害者からの離脱をはかる手段として「指導員をめざす」という行為が行われていたことがその証拠であると言えよう。

(注 1) ニーズセンター「H」は施設発行のパンフレットによれば重度障害者の社会参加を基本に園芸や陶行等の作業を通して、療育（療法）、生活、自立訓練、健康増進等の指導援助を行い、クラブ、レクリエーション活動、各種行事の中から、社会経験を深め、よりよい処遇と賃金保障により、働く喜びや生きがいを得られることを目的とする。また、施設解放や喫茶、売店の業務を通して、地域住民との交流を深め、社会に開かれた施設運営をめざす。

(注 2) 失語症とはいわゆる痴呆などの知能異常がなく、言語機能に関する筋肉・目・耳

などの運動もしくは感覚の障害も認められず、それにもかかわらず言語機能が優される状態であり、聴取（聴覚が正しく、内容が理解される）、または発語（言葉を作りだし、それに意味を与える）、読字、書字の四つの機能が障害されるものを言う。

(注3) 成田真由美氏 1970年生まれ 障害（頸髄損傷） 種目：水泳
アトランタパラリンピック 100メートル自由形：金メダル
50メートル自由形：金メダル
数々の世界記録も樹立し活躍している。

(注4) 乙武洋匡氏 「五体不満足」の著者 早稲田大学学生

1999年8月11日

松木直幸氏（仮名）インタビュー

X大学資料室にて実施（X県）
インタビュアー 樫田美雄（徳島大学）
阿部智恵子（徳島大学大学院）

＝プロフィール＝

55歳

Y県出身。結婚してX県へ（X県は妻の実家）

47歳の時工事現場の足場より転落し右半身麻痺の障害者となる。

身体障害者手帳（2種2級）

障害名（右下肢機能障害5級 右上肢機能全廃）

平成9年2月身体障害者水泳クラブ「ラッコクラブ」（仮名）に入会する。

平成9年11月全国身体障害者スポーツ大会に県代表として出場する。

障害について

障害を持ったのは、工事現場の足場から転落してからです。当時私は、大型のプレハブ冷蔵庫増築を請け負っていました。転落したところに、たまたまL字型のアンクル・ピースがあり、左側頭部に突き刺さり陥没骨折し脳に障害を受けて右半身麻痺となりました。

身体障害者スポーツとして、水泳を始めたきっかけは、病院で主治医に勧められて、リハビリの一環として始めました。水中は負荷がかからないからということでした。

水泳について

Y県では、子供の頃から泳いでいました。田舎でしたから川での遊びが主でした。X県に来てからは子供を連れて川へ行ったり海へ行ったりするくらいでした。

「ラッコクラブ」との関わりについては1997年に入会しました。会員同士はそこだけのお付き合いです。クラブ員で一番若い人は九州での大会（注1）に行った視力障害のある人で養護学校の先生をしています。一番年長の方は63～64歳です。会員は20名で、毎週木曜日が練習日です。

夏は一人でM町のプール（50メートル）に練習に行っています。屋外のプールなので2～3回行ったら真っ黒になります。冬はJ町のプールへ行ったりしています。

水泳をしてよかったと思うことは身体が丈夫になったということと、プールではいろいろな人とのふれあいができることです。またいつも発作止めの薬を飲んでいますが。水泳を始める前は2～3回発作を起こしましたが、今は発作も起きなくなりました。

ルールについて

クラス分けに対する不満はあるけれど言ったところでどうなるでしょうか。どれだけ変

わるというのでしょうか。言ったらストレスがたまるだけでは。自分をそれに合わせて行くということが。ジャパン・パラリンピック、全日本は26通り(2)違っています。ルールについては、他にも気になることがあります。

聾の人で平泳ぎをして、両手をつけてターンのところを片手ターンして失格した人がいる。1年前にも言われたが1年たったので忘れてしまった。普段の泳ぎに問題があると思われる。指導に問題があります。気の毒だが失格です。

去年標準記録をこえていたのですが、手違いからかジャパンパラリンピックに出れませんでした。今年はお出れることになっています。標準記録は公開されていなかったんです。今は去年のコピーも、もらっているし。今はいいです。それで大体わかるから。新しい人が入ったら、言ってあげたいと思います。去年、標準記録が大幅に変わったんです。大阪はレベルが高いんです。片麻痺も変わりました。出るはずのないタイムが出る場合があります。ジャパン・パラリンピックは世界に合わせるということで、2、3年前に片麻痺と下半身麻痺のクラスが一緒になりました。ジャパン・パラリンピックに出るクラス分けで、片麻痺だけのクラスであれば、50メートルで、50秒きる程度が普通の記録なんです。下半身が麻痺であるが、両手が動ける人は、クロールもどンドンできるので42、3秒のタイムが出る時があるんです。

記録や成績について

記録がすべてじゃないと思います。昨年の中四国大会で、会場でメダルをかけた写真を撮ったのですが、私も去年メダルがなかったんです。初めて行った人なんかでメダルのない人もいるのに、差別になるんじゃないかなーという気もしますね。今年は広島でも写真は撮らなかったんです。

指導について

水泳連盟のWコーチに教えてもらいました。半身麻痺だから、今までの感覚だと沈んでしまうんです。もがいている感じになってしまうんです。結局一から始めないといけないんです。Wコーチは、左半身だけで泳いでいます。半身だけで泳げない人に、いろいろ言われても、指導されても気持ちの中に入って来ないんです。違うだろうということになるんです。

リハビリについて

根本的にリハビリというのが頭にあるんです。確かに必死ではありました。すぐやめると思っていたかもしれませんが。もともと水泳クラブへ入った動機が違うし。身体障害者スポーツならなおさら行ってメダルをとれるようになれるか心配です。知的・身体両面からのリハビリが大切だと思います。「本音は勝ちたいですよ」

現在の職業について

駐車場の係をしたりすることもあります。普通だと車の入れ替えをしないといけないのだが、自分ではできませんね。改造車でないと乗れないんです。字も書けないし、運転もできません。なんべんも職業安定所にいったんですけど適当な仕事はないですね。

身体障害者コーナーに行っても見つからないですね。働きたいですね。

水泳以外の趣味について

けがをする前は昔はテニスをしていました。(テニスクラブを結成していた) 童話の会に入っています。

共同参画で「森のエッセイ」を書くこともあります。はばたきコーナーにも投稿します。Z Z新聞の夕刊の「ちょっとええ話の会」のコーナーにも投稿しています。掲載されたこともあります。

障害者スポーツの初級指導員の資格を持っています。去年とりました。吹き矢、フリスビーなどです。水泳はなかなかとれないですねー。

家族について

水泳をすることについては、家族は何にも言わないです。子供は練習場まで車で送ってくれることもあります。特に、会場内で応援することはありません。

障害後の身体について思うこと

障害後は内臓関係がダメージを受けましたねー。脳はもちろんですが。十二指腸潰瘍、胆嚢炎(胆石)で取ってしまったんです。胆道が少し残っています。今はもうあきらめています。

今後の夢

今のまま、続けて行って、身体をいかに持っていくか、もっと自由に動けるようになればいいんですけど。公共施設では、健常者の人と泳いでいます。私が泳いでいるのを見て「最初、変わった泳ぎをしているなと思った」とか「なんで、片方だけで泳いでいるのかと思った」「息継ぎの練習をしているのかと思った」とかあとで言ってくれる人もいます。そりゃ、見ていておかしいですよ。でもそんなもんは無視しています。盲人の方でロープの境など関係なくメチャクチャ泳いでいる人もいますが、「まあ、しょうがないか」と思います。健常者と泳ぐことは別になんとも思っていないです。健常者とともに、こだわりなく泳ぐことが大事と思っています。

【松木さんのインタビュー についての分析】

松木さんのインタビューは、障害者スポーツの原点を考える上で役に立つであろう。

障害後のリハビリテーションの一環として水泳を始め、最初はプールへの出入りもできにくかったが、今や、大きい大会にまで、出場できるまでになっている。彼の水泳における成長ぶりには、目をみはるものがある。持ち前のがんばりと地道な努力が実を結んだ結果だと言えよう。松木さんは次のように言う。「記録がすべてじゃない」「障害者水泳は勝ち負けを気にしている人ばかりじゃあない」「もっと楽しんでもいいのでは」と。

「リハビリテーションが大切」という発言の裏には、健常者としての自分を意識化したいという願望があると思われる。そしてそれは、知らず知らずのうちに、人を競技性へと駆

り立てるようになっていくのかもしれない。障害者水泳を続ける中で「勝てる自分」を発見してしまった松木さんにとって「もっと障害者スポーツは楽しむべきものであるはずだ」という思いと、より高い競技性の中で「がんばろう」という二つの相反する思いが交差していることに注目すべきであろう。

スポーツという競争社会で、個人としては「記録がすべてではない」と言いながら、もう一方で負けずぎらいの松木さんがいて、記録がすべてでないとわかりつつも、競争社会に参加するということもありうるだろう。これは「本音は勝ちたい」という本稿中の言葉からも読み取ることができるだろう。

それと競争とか勝ち負けということに鋭敏な感情というものを持った自分というものをそこにいる人に投影してその果てに出てきた感想が「差別である」という感情表現なのである。

松木さんは水泳の他にもたくさん の趣味がある。エッセイを書いたり、童話の会にも入っている。これは、身体面だけでなく、精神面の充実を図りたいという松木さんのバランスのよい生き方なのだろう。

(注 1) この大会は第 10 回九州身体障害者水泳選手権大会を指す。

(注 2) 競技団体であるところの日本身体障害者水泳連盟の選手権大会のクラス分けが採用されているところの地域連盟等主催大会の分類としての 26 通りのことである。ちなみに現在日本で行われている身体障害者水泳大会には 3 通りのクラス分けが存在しそのうちの一つは、ジャパン・パラリンピックの区分、そしてもう一つは、全国身体障害者スポーツ大会における水泳競技での区分であり、そして、最後がここで紹介されている区分である。

1999年8月22日・2000年1月24日

花野友彦氏（仮名）インタビュー

Nドーム（大阪）、Y市内事務所（X県）にて実施
インタビュアー 阿部智恵子（徳島大学大学院）

=プロフィール=

59歳

手に障害がある（高校の時の事故がもとで手首の関節より先の欠損がある）

X県出身

Y市水泳クラブに入っている。

53歳より水泳を再開した。（30数年のブランクを経て）

地方公務員で昨年退職した。現在も地方公務員（非常勤特別職、研修の方を担当している）である。

ジャパン・パラリンピック及び日本身体障害者水泳選手権大会に毎年参加している。

[] の中は筆者の補注

水泳を始めた動機について

私の友人の奥さんがY市身体障害者水泳クラブの会長をしていて、会員が少なかつたんです。それで「花野さん、ぜひ入ってください」と言われて、半年位たっただけで入ったのがやみつきですね。平成5年の2月の22日でした。あしかけ7年になりますね。

水泳について

私が、障害を持ったのは、高校2年生の時です。それまでも、泳ぐのは好きなスポーツでしたが〔障害を持ってからは〕ほとんど泳いでいなかったんです。30数年は泳いでなかったんです。水の中に、身体をつけるというのは、なんとも心地がいいんですね。それと、むかしとったきねづかかスイスイと泳ぐことができたんです。

初めて、平成5年の5月に記録会のようなプレ大会がありました。平成5年の11月に全国身体障害者スポーツ大会をX県でやりました。N市をメイン会場として、水泳は、S町でありました。そのプレ大会を5月にやったんです。2月に始めて5月に泳いで当時の全国身体障害者スポーツ大会の50メートル自由形の最高記録を上回りました。私は、随分記録を上回ったんです。それで面白くなったんです。いろいろ情報を集めてみると、広島でやったり、大阪で近畿大会、日本身体障害者水泳選手権大会、ジャパン・パラリンピック大会などが開催されていました。平成5年にこれら大会に出て、そのすべてで金メダルをいただきました。

今はメダルを集めるのが、趣味になりました。今は〔メダルが〕金、銀、銅あわせて40個ありますね。しかし、だんだんとメダルもとりにくくなりましてね。全体のレベルが上がってきて、選手層も厚くなってきたんですね。

私は、70歳まで選手として泳いでやろうと思っています。選手として泳ぐのは[ただ泳ぐのと違い]記録を取るの、練習しなくちゃなりません。特にこのような大会は、高いレベルなので。標準記録を達成しなくてはなりません。50メートルは長いですよ。

70歳まで選手として出たいのです。

記録は、今の年齢で下がりぎみです。水泳を始めた時が最高でした。平成5年に53歳から始めました。

今と昔の泳ぎ方は違ってきています。例えば、昔は平泳ぎは、足が主な推進力でした。今は、足の推進力60%手の推進力40%と計算されており手のかきかたが昔と随分違うんです。昔は両足で水をはさんでいましたが、今は足の裏で水を蹴って、推進力を得ます。泳ぎ方が随分進化しました。その方が、速く泳げます。クロールにしても昔は手を水車のように回していました。今は手をSの字を描くように動かしています。どうしてかという、水の中でこぐ距離が長いんです。それだけ推進力が出ます。

一つの目標を持つと、出場するために、生活を節制するようになります。深酒をやめるとか。私は[宴会等]の二次会はほとんど行きませんね。一つの目的を持って、[試合に]出たいから、生活を節制します。よい記録が出るというよりも、自分の生活が改まるでしょう。食べ物には極力注意をして食べています。

ジャパンパラリンピックの見学者は多いかということですか？見学者はいつもそんなに多くはないようです。主に選手、家族、関係者、ボランティアなどです。PRもあまりしていないようです。

指導ということについて

以前、私も同じクラブの中で、指導をしていたことがあります。上手になってもらおうと、練習計画まで作ってしていましたがこんなことをしていたら自分の練習がおろそかになると思って止めました。申し訳ないけれど、今は、自分のことでせいいっぱいなので。

これからの水泳との関わりについて

水泳を自分の生きがいとして、また『最大の友人』として付き合いこうと思っています。水泳で得たものは多いです。人とのつながりもできたし、自分の生きがいでもあります。各地の大会に出ることで、旅行をする楽しみもできました。大会で「花野さん、待っていたよ」と声をかけてくれるのもうれしい。

ライバルについて

私は目標とする選手はいません。自分本位の『マイペース』です。人を相手にするという事に目標を置いていません。人を相手にどうこうする歳でもありません。マイペースで生活すべてをよい方に向けていきます。

家族について

妻とはたいてい一緒に旅行しています。平成7年頃より、県外大会へ妻と一緒に旅行をかねて行っています。妻も家事から解放されてきげんがいいので。

【花野さんのインタビューについての分析】

人は自分の人生を価値づけたり、意味づける手段として、人生の中の目的、目標を語ることができると言えよう。

「メダルを集めること」という競技志向の目標は彼のこれまでの人生同様、自分を励起する目標になっている。ここからわかることは、花野さんにとっての人生はこれまで一貫したものであり、水泳もその例外ではないということである。その一方で花野さんは「水泳を楽しみたい」、「マイペースでいきたい」という発言もしている。この点はどう理解したらよいだろうか。花野さんの存在価値の主要部分が有能な公務員であることによってすでに十分支えられていると考えられることが参考になるだろう。彼は自分の存在価値を従的に補充する手段として水泳を用いるのだ。そう考えるならば、それをなるべく長く活用しようという余裕ある姿勢が理解できるようになるのではないだろうか。「70歳まで選手で」という発言も、一方的に競技志向の観点から考えるよりは、生活の伴走者としての水泳という観点からも考えられてよいだろう。しかし、彼のような「幸せな」「余裕ある」障害者スポーツ（水泳）との関わりが、他の誰にも可能であるかどうかという点はよく考える必要がある点であろう。障害者でなくなる（障害者らしくない障害者になる）ために、障害者スポーツに熱情を傾けるといふパラドックスから離脱する条件及び資源はまれにしか獲得できないものであるように思われる。

参考文献

- 藤田紀昭 1998 『ディサビリティ・スポーツ — ぼくたちの挑戦 — 』, 東林出版社。
- 池田勝・守能信次編 1998 『スポーツの社会学』, 杏林書院。
- 石川准 1992 『アイデンティティ・ゲーム — 存在証明の社会学 — 』, 新評論。
- 石川准 1999 『障害学への招待』, 赤石書店。
- 日本身体障害者スポーツ協会 1990 『身体障害者スポーツにおける障害クラス分けに関する調査研究報告書』, 日本身体障害者スポーツ協会 (徳島大学総合科学部 榎田研究室所蔵)。
- 日本身体障害者スポーツ協会&日本身体障害者水泳連盟 1991 『身体障害者水泳競技(調査研究報告書)』, 日本身体障害者スポーツ協会 (徳島大学総合科学部榎田研究室所蔵)。
- Plath, David 1980 *Long Engagement: Maturity in Modern Japan*, Stanford University Press. =1985 井上 俊・杉野目康子訳 『日本人の生き方』, 岩波書店。
- 総理府編 1998 『障害者白書』, 大蔵省印刷局。
- 橘敏也他 1989 『全科 疾患ブック』, 株式会社ミクス。

執筆者一覧

〔盲人卓球班〕

石村典子・大谷崇・浜松真理子

〔車椅子バスケットボール班〕

小川哲史・幸田裕紀・坂井理恵・土居清香

〔ろうバレー班〕

稲葉良・梯恭一・吉野秀紀

〔インタビュー〕

阿部智恵子

〔授業担当教員〕

樫田美雄

障害者スポーツにおける相互行為分析

—平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書—

2000年2月1日発行

編集 榎田美雄

発行 徳島大学総合科学部人間社会学科国際社会文化研究コース
現代国際社会分野『社会調査実習報告書』刊行プロジェクト

〒770-8502

徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

☎(088)-656-9308 (榎田研究室)